教　育　研　究　業　績

氏名　石隈利紀
学位　Ph.D.（学校心理学）

研究分野	研究内容のキーワード
学校心理学、スクールカウンセリング	チーム援助、レジリエンス、援助サービスシステム

主要担当授業科目	学校臨床心理学演習、教育分野に関する理論と支援の展開、学校心理学演習 教育・学校心理学、スクールカウンセリング入門、学校心理学セミナー

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 チーム援助	1990 年～現在	筑波大学保健管理センター学生相談室専任カウンセラーとして、学生生活上の困難（学業面、心理・社会面、進路面）、精神疾患に関わる問題について、担当教員、医師、保護者らとチーム援助を行った。そして筑波大学心理・発達相談室での相談活動や附属学校教育局指導教員として、小学生・中学生・高校生不登校・いじめ、発達障害等の問題に関して、担任、保護者、養護教諭、地域の援助資源らとチーム援助を行ってきた。
2　作成した教科書，教材 『学校心理学－教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス－』（誠信書房）	1999 年	学校心理学の理論と実践について体系化した著書であり、学校心理学に関わる教科書として、大学および大学院で使用されている。理論編では、心理教育的援助サービスのモデル（援助者、援助の焦点、三段階の心理教育的援助サービスなど）が論説され、実践編では、アセスメント、カウンセリング、コンサルテーションの方法が解説されている。
『石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門－学校心理学・実践編』（図書文化）	2003 年	田村節子氏と共同開発した「石隈・田村式シート」は、神奈川県、福島県、茨城県、富山県、山形県、福井県、高知市、広島市をはじめ、多くの都道府県で、発達障害や不登校に関する相談のシートとして活用されている。
『学校心理学ハンドブック』 （教育出版）	2004 年	日本学校心理学会（編）福沢周亮・石隈利紀・小野瀬雅人（責任編集）で、　学校心理学に関する 10 のキーワード（学校心理学、心理教育的援助サービス、アセスメント、カウンセリング、学校教育相談、特別支援教育、学校心理士）について解説したもの。大学・大学院の教科書、学校心理士受験準備のテキストとして使用されている。
『ＷＩＳＣ－Ⅲアセスメント事例集―理論と実際―』 （日本文化科学社）	2005 年	藤田和弘・上野一彦・前川久男・石隈利紀・大六一志（編著）で、 ＷＩＳＣ－Ⅲのアセスメントの方法およびその結果に基づく援助事例についてまとめている。ＷＩＳＣ－Ⅲを活用する臨床家によって広く活用されている。
『現代学校教育講座：学校教育と心理教育的援助サービスの創造』（学文社）	2014 年	石隈利紀・家近早苗・飯田順子（著）、小島弘道（監修）で、教育系や教育心理系の大学院において、高度専門職業人としての教師を育てるために使われる教科書として作成された。学校心理学の視点から、心理教育的援助サービスの理論と実践モデルに焦点をあてて、子どもへの援助の方法と実践について具体的に論じた。第１章、第２章「心理教育的援助サービスとその実践」、第３章「授業を変える心理教育的援助サービス」、第 4 章「生きる力をはぐくむ心理教育的援援助サービス」、第５章「学校づくりを支えるコーディネーション委員会」、第６章「コーディネーション委員会への参加による教師の意識の変化」から構成されている。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		筑波大学教員評価で 2010 年から 2012 年まで「Ｓ」評価。2013 年以降は副学長のため評価は受けず。

4　実務の経験を有する者についての特記事項を有する者についての特記事項	1989 年 8 月～1990 年 6 月 1993 年 4 月～1995 年 3 月 2001 年 4 月～2013 年 3 月	カリフォルニア州ソラナビーチ学校区スクールサイコロジスト・インターン 茨城県谷田部保健所外国人健康相談事業相談員 筑波大学心理発達教育相談室相談員
5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 中級産業カウンセラー（登録番号 9403；2004 年よりシニア産業カウンセラー）	1994 年 4 月～現在	日本産業カウンセラー協会による「産業カウンセラー」資格の認定や研修に協力してきた。カウンセリングに関する知識・経験や「論理療法」に関する研修で、貢献している。
臨床心理士（登録番号 4620） 1996 年 4 月 ～2011 年 3 月	1996 年 4 月～2011 年 3 月	臨床心理士として心理臨床に関する実践・研究を行った。
学校心理士（登録番号 97076） 学校心理士スーパーバイザー（登録番号 SV0002）	1997 年 4 月 ～ 2011 年 12 月 2012 年 1 月～現在	「学校心理士」資格の立ち上げと維持発展に貢献してきた。 そして「学校心理士」「学校心理士スーパーバイザー」として筑波大学大学院や東京成徳大学のカリキュラムの調整役をするとともに、現職スクールカウンセラー・教師そして大学院生の実践のスーパービジョンをしている。
特別支援教育士スーパーバイザー（登録番号 SV02-051）	2002 年 4 月～現在	「特別支援教育士スーパーバーザー」として、筑波大学大学院生および地域の特別支援教育士の実践のスーパービジョンを行ってきた。
認定カウンセラー（2007 年 4 月よりスーパーバイザー：登録番号 SV-0017）	2002 月 8 月 ～ 2017 年 3 月	「認定カウンセラー」として、筑波大学大学院でカウンセリングを学習する学生のスーパービジョンを行った。
ガイダンスカウンセラー	2011 年～現在	「ガイダンスカウンセラー」として、予防開発的な育てるカウンセリングについて推進している。
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） ［著書］ 1. Handbook of child and adolescent assessment	共著	1993 年	Allyn & Bacon, 192-207	カウンセリングにおいて、子どもや青年に対して用いる心理検査の適切な活用方法について論じた。担当章"Intellectual and achievement testing"では、アメリカで主として使われている知能検査（ビネー検査、ＷＩＳＣ－Ｒ、Ｋ－ＡＢＣ）と学力検査（Ｋ－ＴＥＡ、ＰＩＡＴ－Ｒなど）の標準化サンプル、信頼性および妥当性について検討した。（分担章共著者：Kaufman, A. S. & Ishikuma, T.）（編著者：Ollendick, T.H. & Hersen,M..）
2. ＷＡＩＳ－Ｒ簡易実施法	共著	1993 年	日本文化科学社, 15-19	日本の代表的な大人の知能検査であるＷＡＩＳ－Ｒの簡易実施法についての理論的・実践的な本である。担当部分「ＷＡＩＳ－Ｒ簡易実施法－Kaufman らの方法」ではアメリカにおける Kaufman と筆者（石隈らの研究を紹介し、短くかつ信頼性・妥当性のある簡易実施法へのヒントを与えた。（編著者：藤田和弘・前川久男・小林重雄・大六一志；　監修者：三沢義一）
3. Ｋ－ＡＢＣ心理・教育アセスメントバッテリー解釈マニュアル	共著	1993 年	丸善メイツ, 79-104	本書は日本版Ｋ－ＡＢＣの検査結果を解釈するためのマニュアルである。担当部分「Ｋ－ＡＢＣの信頼性・妥当性」では、検査結果の基盤になるＫ－ＡＢＣの信頼性と妥当性について、標準化のデータより紹介した。（訳編著者：松原達哉・藤田和弘・前川久男・ 石隈利紀）
4. 教職研修実践ハンドブック：学校カウンセリングの考え方・進め方」	共著	1994 年	教育開発研究所, 114-115	本書は教員のための学校カウンセリング」の実践に資する本である。担当章「学習障害児の診断と指導」では、学校生活の困難さを示す学習障害児の理解・診断とそれに基づく指導について論説した。（編者：松原達哉）
5. メンタルヘルスガイド― 充実した大学生活をおくるために―	共著	1994 年	教育出版, 190-194	本書は大学生の学生生活の理解と支援のためのガイドブックである。担当章「海外留学の心理と適応」では、海外留学における心理的な問題と異文化の適応について論説した。 （分担章共著者：石隈利紀・藤延芳子） （編著者：松原達哉）
6. Ｋ－ＡＢＣアセスメントと指導 ― 解釈の進め方と指導の実際 ―	共著	1995 年	丸善メイツ, 30-48	本書は、個別式知能検査、日本版Ｋ－ＡＢＣの解釈についての論説とＫ－ＡＢＣを活用した事例（ケースレポート）からなる。担当章「検査結果の解釈」では、Ｋ－ＡＢＣの検査結果の解釈について、「情報処理－習得度」「継次処理－同時処理」の枠組みから論説した。（編著者：松原達哉・藤田和弘・前川久男・ 石隈利紀）
7. カウンセリング・トピックス１００	共著	1995 年	誠信書房, 19-35	カウンセリングに関するトピックスを 100 選び、解説した本である。カウンセラーには実践能力だけでなく研究能力が必要であるので、時代のニーズに応じる研究テーマとしてトピックスが、12 分野から選ばれた。担当の「学校カウンセリング」では学校分野におけるトピックスを選び、解説した。（編著者：國分康孝）

8. 最新心理テスト法入門	共著	1995 年	日本文化科学社, 56-59	心理テストに関する基礎知識と適切な利用の仕方について解説した本である。担当の「Ｋ－ＡＢＣ心理・教育アセスメントバッテリー」では、本検査の概要、検査方法、援助サービスにおける活用について述べた。（編著者：松原達哉）
9. スクールカウンセラー：その理論と展望	共著	1995 年	ミネルヴァ書房, 27-42	スクールカウンセラーが文部省の事業として試験的な活用を始めた平成 7 年、スクールカウンセラーの実践を支える理論的基盤と実践について論説し、スクールカウンセラーの方向性を提示した。担当章「スクールカウンセラーと学校心理学」では、スクールカウンセラーの活動を学校心理学の枠組みから教育的援助ととらえ、教師とチームとなって、不登校・いじめ・非行等に対応するモデルを示した。（編著者：村山正治・山本和郎）
10. 温かい認知の心理学―認知と感情の融接現状の不思議	共著	1997 年	金子書房, 123-140	知的機能と感情的機能とが融接（クロスオーバー）する領域で起こる不思議な現象「温かい認知」について、研究に基づく理論編（例：知覚と感情）と実際に役立つ実践編とから構成される。担当章「温かい認知で心を軽くする方法― 論理療法入門」では、「べきであるという『熱い認知』」を、「こうであるにこしたことはないという『温かい認知』」に変えるステップを通して、心を軽くするプロセスを解説した。（分担章共者：石隈利紀・今田里佳）（編著者：海保博之）
11. 心理テストの未来	共著	1997 年	図書文化, 10-37	心理テストの未来」について、教育、産業等の領域から論じたシンポジウムの内容をまとめた本である。担当の「心理テストの活用と展開 ― 教育・臨床の立場から― 」では教育・臨床領域で使われる心理検査（ウエクスラー式等）について述べ、その課題や可能性について論じた。（編者：日本学術会議シンポジウム編集委員会）
12. 青年期の発達	共著	1998 年	日本文化科学社, 121-141	青年期の発達の特徴と課題について論説した本である。担当章「進路決定と不安－大学生を中心に」では学生相談のさまざまな事例をもとに、進路決定に関わる不安について述べた。（編著者：落合良行）
13. 教育心理学Ⅱ－発達と臨床援助の心理学	共著	1998 年	東京大学出版, 155-177	本書は、生涯発達における課題とそれに伴う問題、および問題解決への援助について論じた。そして学校、家庭などにおける援助の方法について議論した。担当章「学校臨床」で、学校における子どもの問題状況についての援助について学校心理学の立場から議論した。（編著者：下山晴彦）
14. 日本版ＷＩＳＣ－Ⅲ知能検査法：理論編	共著	1998 年	日本文化科学社, 76-79	本書は、個別知能検査ＷＩＳＣ－Ⅲのマニュアルである。担当章「ＷＩＳＣ－Ⅲ検査者の資格と倫理 」では、実施において高い技術が求められる個別の知能検査を実施する検査者の資格と子どもの援助サービスを行う専門家としての倫理について論じた。（原著者：Wechsler, D.）（訳編者：東洋・上野一彦・藤田和弘・前川久男・石隈利紀・佐野秀樹）
15. 学級担任のための育てるカウンセリング全書３ 児童生徒理解と教師の自己理解	共著	1998 年	図書文化, 116-121	本書は、児童生徒一人ひとりと集団を理解する視点と方法について論説するとともに、児童生徒を理解する教師自身の自己理

				解の重要性を示す。担当章「テストを生かした援助システム」では、子どもの理解のためにテストにより客観的なデータを収集し、それを観察など日々のデータと統合する方法について述べた。（編著者：國分康孝・山口正二・杉原一昭・川崎知己）
16. 学校カウンセリング	共著	1999 年	日本評論社, 10-17	本書は、学校カウンセリングを「児童生徒が学校生活を送るうえで出会う問題の解決を援助する人間関係」と定義し、学校カウンセリングの基本問題、児童生徒への援助、保護者・教職員への援助などをとりあげた。担当章「学校カウンセリングにおける４種類のサービス」では、学校心理学に基づき、アセスメント、カウンセリング、コンサルテーションなどを解説した。（編著者：國分康孝）
17. 論理療法の理論と実際	共著	1999 年	誠信書房, 49-60	本書は、理論理療法の原理、研究成果、実践について論じた。担当章「少しゆっくりの論理療法－カウンセリングにおける三種類の人間関係モデルから」では、クライエントの受容から始まり、ビリーフの発見と点検に進むプロセスを、日本人に適応しやすい論理療法の一つのモデルとして論じた。（編著者：國分康孝）
18.学校心理学－教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス－	単著	1999 年	誠信書房	一人ひとりの子どもの問題状況の解決をめざした、教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービスの理論と実践について、論じた。とくに学校心理学の理論とモデル、学校心理学における実践の方法（アセスメント、カウンセリング、コンサルテーション）について議論した。援助チーム、学校教育システムへのコンサルテーションなど、心理教育的援助サービスにおける新しい概念を提案した。
19. 臨床精神医学講座・精神障害の予防	共著	2000 年	中山書店, 23-332	本書は、広く精神障害の予防について論じた。担当章「スクールカウンセリング」で学校場面における子どもの問題状況への援助サービスについて学校心理学の立場から論じた。（編著者：井昌弘・牛島定信・倉知正佳・小山 司・中根充文・三好功峰）
20. 続・構成的グループ・エンカウンター	共著	1999 年	誠信書房, 72-79	本書は、構成的エンカウンター・グループの理論と実践について論じた。エンカウター・グループの理論的背景とさまざまなカウンセリング現場での実践を紹介し検討した。担当章「学校心理学における構成的グループ・エンカウンター」では、学校における構成的グループ・エンカウンターの活用の意義と留意点について論じた。（分担章共著者：石隈利紀・横島義昭）（編著者：國分康孝）
21. 発達臨床心理学の最前線	共著	2001 年	教育出版, 85-92	本書は、子どもの発達と援助に関して、子どもと家族・学校・社会・メディアについて論じて、さらに子どもの問題行動や発達の障害について論じた。担当章「発達課題への取り組みの苦戦とその援助 ― 学校心理学の視点から― 」では、子どもの発達課題に関する苦戦を指摘し、子どもを援助するアセスメントと援助環境について論じた。（監修者：杉原一昭；編著者：新井邦二郎・桜井茂男・大川一郎）

22. 講座臨床心理学：臨床心理学とは何か	共著	2001 年	東京大学出版会, 289-305	本書は、臨床心理学の専門性、日本の臨床心理学の発展にむけて、臨床心理学と他の専門領域との関連性について論説した。担当章「学校教育と臨床心理学」では、子どもの発達援助をめざすヒューマン・サービスとしての学校教育と臨床心理学の交流について、連携・協働・融合の視点から論じた。そして融合の方向として、学校心理学を論説した。（編著者：下山晴彦・丹野義彦）
23. 論理療法と吃音－自分とうまくつき合う発想と実践（2005 年「やわらかに生きる― 論理療法と吃音に学ぶ」と改題・改変　金子書房より出版）	共著	2001 年	芳賀書店	本書は、論理療法の発想と実践、そして吃音に関する論理療法、大阪吃音教室の実践を論じた。論理療法が「人前で上手に話せなければならない」という吃音に悩む人のイラショナル・ビリーフへの対応に有用であることを示した。（共著者：石隈利紀・伊藤伸二）
24. 学校臨床そして生きる場への援助	共著	2002 年	日本評論社, 23-56	本書は、東京大学近藤邦夫教授退官を記念して、近藤教授の教えを受けた実践家・研究者が、「学校臨床心理学」を中心において、心理臨床の新しい流れを論じたものである。筆者のみが客員として依頼され、担当章「学校における心理教育的援助サービスの現状と展望」において、学校心理学の立場から、学校という教育の場での、子どもへの援助について論じた。（編著者：沢崎俊之・中釜洋子・齋藤憲司・高田治）
25. 教育心理学ハンドブック	共著	2003 年	有斐閣, 69-79	本書は、教育心理学について、その定義・歴史、役割から学校心理士および研究まで、幅広く論じた。担当章「学校心理学と学校心理士」「学校教育と学校心理士」では、学校心理士による心理教育的援助サービス（アセスメント、コンサルテーション、カウンセリング）や三段階の心理教育的援助サービスについて論じた。（分担章共著者：石隈利紀・小野瀬雅人・永松裕希）（編者：日本教育心理学会）
26. 育てるカウンセリングによる教室課題対応全書 第 8 巻 学習に苦戦する子	共著	2003 年	図書文化, 10-13	本書は、学習に苦戦する子どものための育てるカウンセリングのモデルについて、学校心理学や教育心理学の枠組みで論説した。担当章「学習の苦戦を援助するとは」では、学習の苦戦を子どもの要因と学習環境の要因から整理し、多面的な援助について論じた。（監修：國分康孝・國分久子）（編著者：石隈利紀・朝日朋子・曽山和彦）
27. 講座 学校心理士― 理論と実践 1 ― 学校心理士と学校心理学	共著	2004 年	北大路書房, 54-69	本書は、学校教育と学校心理士、学校心理士を支える学校心理学、学校心理士の教育と研修について論じた。担当章「学校心理士の役割と行動」では、学校心理士による心理教育的援助サービス（アセスメント、コンサルテーション、カウンセリング）および三段階の心理教育的援助サービスにおける学校心理士の役割について論じた。（編著者：松浦宏・新井邦二郎・市川伸一・杉原一昭・堅田明義・田島信元）
29. 上級編 教育カウンセラー標準テキスト	共著	2004 年	図書文化, 125-134	本書は、教育カウンセラーの実践に関するテキストの上級編である。担当章「チーム援助」では、学校心理学の定義や三階建ての教育援助、４領域の心理教育的援助サービス、個別のチーム、学校レベルの援助サービスのコーディネーション、管理職のマネジメントについて解説した。さらに、具

				体的に援助チームの構成員の役割、援助チームのタイプについて論じた。（分担章共著者：石隈利紀・田村節子）（編者：日本教育カウンセラー協会）
30. 臨床心理学全書 第 10 巻	共著	2004 年	誠信書房, 124-198	本書はクライエントの問題解決を援助し、成長を促進する臨床援助活動の理論と技法のひとつである心理教育的アプローチについて解説した。担当章「心理教育的アプローチ」では、学校心理学を基盤にして心理教育的アプローチによる援助について議論し、さらに学校教育と非行臨床における援助について実践事例を紹介し解説した。（分担章共著者：石隈利紀・田村節子・生島浩）（編著者：亀口憲治；監修者：大塚義孝・岡堂哲雄・東山紘久・下山晴彦）
31. よくわかる臨床発達心理学	共著	2005 年	ミネルヴァ書房, 220-221	本書は、臨床発達心理学のキーワードである、発達、障害、発達臨床の現場や発達臨床にかかわる人々について解説した。担当章「学校心理士」では、発達臨床にかかわる専門家として、学校心理士の資格と活動について解説した。（編著者：麻生武・浜田寿美男）
32. 現代のエスプリ 特集 家族療法の現在	共著	2005 年	至文堂, 139-148	本書は「家族療法の現在」について特集を組み論じた。担当章「学校臨床における心理教育的アプローチ」では、心理教育的アプローチの現在のひとつとして、学校心理学とネットワーク型援助チームについて論じた。さらに実践事例について解説した。（分担章共著者：石隈利紀・田村節子）（編著者:亀口憲治）
33. ＷＩＳＣ―Ⅲアセスメント事例集―理論と実際―	共著	2005 年	日本文化科学社, 71-91	本書は、ＷＩＳＣ－Ⅲのアセスメントの進め方の実際およびその結果に基づく援助事例 16 について論説している。担当章「賢いアセスメントとケースレポートの書き方」では、ＷＩＳＣ－Ⅲによる賢いアセスメントについて論じて、ケースレポートの書き方について解説した。（編著者：藤田和弘・上野一彦・前川久男・石隈利紀・大六一志）
34. チーム援助で子どもとの関わりが変わる－学校心理学にもとづく実践事例集	共著	2005 年	ほんの森出版, 8-13, 19-24, 151-154	本書では、学校心理学の理論を解説し、学校心理学を基盤としたチーム援助の実践事例を論考した。「チーム援助の発想とシステム」、「援助チームの作り方・進め方」（分担章共著者：田村節子）、「14 事例から学ぶチーム援助のヒント」を分担した。（編著者：石隈利紀・山口豊一・田村節子）
35. 現場で役立つ特別支援教育ハンドブック	共著	2005 年	日本文化科学社, 221-226, 226-233, 234-239	本書は、発達障害等特別の支援が必要な子どもたちの支援に関するものである。担当章「特別支援教育コーディネーターに求められる行動と能力・権限」「特別支援教育コーディネーターの養成プログラム」「支援のためのネットワークづくり」「地域支援システムの構築」では、援助者の行動と能力、援助者のチームとネットワークに関して、論説した。（編著者：下司昌一・石隈利紀・緒方明子・柘植雅義・服部美佳子・宮本信也）
36. 学校心理学が変える生徒指導	共著	2005 年	学事出版, 11-15, 40-49, 119-121, 156-163, 163-168, 184-189	本書は生徒指導を学校心理学の心理教育的援助サービスの視点から見直し、一人ひとりの児童生徒の援助ニーズに応じる生徒指導を提唱した。本書を監修するとともに、

				「学校教育サービスと学校心理学」「心理教育的援助サービスの内容」「生徒指導における援助サービスの実際：チーム援助の理論」「コンサルテーションが支える生徒指導：コンサルテーションの基本的な考え方」「コンサルテーションが支える生徒指導：コンサルテーションの基本的な考え方：生徒指導におけるコンサルテーションの実際」「新たな生徒指導を求めて」の章を担当した。（編著者：山口豊一；監修者：石隈利紀）
37. 寅さんとハマちゃんから学ぶ助け方・助けられ方の心理学 ―やわらかく生きるための 6 つのレッスン	単著	2006 年	誠信書房	映画「男はつらいよ」の「フーテンの寅さん」と「釣りバカ日誌」の「ハマちゃん」の人との関わり方を分析し、援助のあり方、文化とのつきあい方を論じた。たとえば、「100 人に対して 100 の顔で接する」寅さんの関わり方は相手の文化に染まりながら、相手を共感するという文化人類学的なアプローチである。一方、「100 人に対して一つの顔で接する」ハマちゃんの関わり方、は相手と自分の文化の違いを尊重する異文化心理学的アプローチであると指摘した。
38. Handbook of International School Psychology	共著	2006 年	Sage Publishing, 217-227	本書は、世界 45 カ国の学校心理学に関して論考した。担当章“School psychology in Japan”では、日本における心理教育的援助サービス（学校生活に関する援助、スクールカウンセリング）の歴史と、今日の学校教育の問題（いじめ、不登校など）や特別支援教育の新しい動向について論じながら、教師の役割や「学校心理士」という資格について国際的な視点から論じた。（分担章共著者：Ishikuma, T., Shinohara, Y., & Nakao, T.）（編著者：Jimerson, S., Oakland, T., & Farrell, P.）
39. 学校心理学ガイドブック第 2 版	共著	2007 年	風間書房, 5-14, 24-33, 139-154	本書は、学校心理学と学校心理士、学校心理学の領域とキーワード、学校心理士になるためについて解説した。「学校心理学と学校心理士（学校心理士の意義と特徴、学校心理士の活動の概要、学校心理学とその近辺領域の異同と学校心理士の活動の特色）」、「学校心理学の領域と学習課題およびキーワード」、「学校心理学に基づくケースレポート」（中澤潤と共著）の 3 つの章を分担した。（責任編集者：塩見邦雄・石隈利紀）（編者：学校心理士資格認定委員会）
40. 総合教育技術 5 月号増刊 最新教育基本用語 2007 年度版	共著	2007 年	小学館, 338-353	本書は、教育基本法の改正をとりあげ、教育実践の基本用語について論説したものである。担当章の「学校カウンセリング」では、学校心理学に基づき、学級崩壊や児童虐待などの問題、アセスメントやコンサルテーションなどの実践、行動療法などのカウンセリングの理論等に関する用語の定義と教育実践について説明した。
41. これからの教師	共著	2008 年	建帛社, 124-134	本書はこれからの教師に求められる役割と歴史的に見た教師像について論説した。とくに教師が学ぶべき課題や教員養成について論じている。担当章「学校の危機管理」では、子どもと学校の危機についての理解と危機の予防・対応について、学校で組織的に行うことを論じた。（編著者：高倉翔・加藤 章・谷川彰英）

42. 特別支援教育 月めくりカレンダー　学級担任・学校・地域で進める実践 12 か月	共著	2008 年	金子書房, 338-353	本書は、第 1 部「子どもと先生のための特別支援教育カレンダー」、第 2 部「私の取り組み、私と同じ人へのメッセージ」、第 3 部「解説・資料子どもたちの理解のために」からなる。実践家の現場の知恵を、全体的に学問的な視点から整理した。（監修者：石隈利紀；編著者：瀬戸口裕二）
43. 最新教育課題解説ハンドブック	共著	2008 年	教育法規研究会, 1401-1405	本書は管理職試験・教職研修のために、さまざまな課題への対応について解説した。担当項目「学校カウンセリング」では学校カウンセリングについての問題や学校での対応について解説した。（編者： 教育法規研究会）
44. 新生徒指導ガイド:開発・予防・解決的な教育モデルによる発達援助	共著	2008 年	図書文化, 110-111	生徒指導に関して問題行動への対応だけでなく、ガイダンス、個別の面談、コーディネーションを含む学校や学級集団へのアプローチなどからなる。執筆章「コーディネーション」では、生徒指導委員会などのコーディネーション委員会について、その機能を中心に事例をあげて述べた。（分担章共著者：家近早苗・石隈利紀）編著者：八並光俊、監修；國分康孝）
45. 現代のエスプリ「子育てを支える心理教育とは何かー誕生から青年期まで」	共著	2008 年	至文堂, 15-44, 91-101	子どもへの支援の方法としての心理的援助と教育的援助の論考からなる。「「座談会子どもの発達と心理教育・支援の現状と理想」（青木豊・中釜洋子・石隈利紀・松本真理子）および「学校教育における心理教育的援助サービス」（家近早苗・石隈利紀）を担当した。後者の章では、学校での心理教育的援助サービスに関する概要と学校での子どもへの援助を、学校の資源のコーディネーションという視点から論じた。（編著者：松本真理子）
46. 特別支援教育Ｑ＆Ａ	共著	2009 年	ジアース教育新社, 138-139	本書は、特別支援教育に関わる教職員の現場の問いに答えるものである。担当項目「一斉授業の中で、個に配慮した支援を行うための工夫はどのようなものがありますか？」では、授業における一人ひとりの子どもの援助ニーズに応える配慮について具体的に解説した。（編著者：全国特別支援学校知的障害教育校長会）
47. 総合教育技術 5 月号増刊　最新教育基本用語 2009～2010 年版	共著	2009 年	小学館, 338-353	本書は、教育実践の基本用語について論説したものである。担当章の「学校カウンセリング」では、学校心理学に基づき、いじめなどの問題、アセスメントやコンサルテーションなどの実践、行動療法などのカウンセリングの理論等をとりあげて、用語の定義と教育実践について説明した。
48. 学校での効果的な援助～学校心理学の最前線	共著	2009 年	ナカニシヤ出版, 1-11, 201-211	本書は、学校心理学の研究と実践について研究の動向、実践のモデル、実践事例から得られた示唆と今後の課題について論じたものである。三段階の心理教育的援助サービス（一次的援助サービス、二次的援助サービス、三次的援助サービス）の視点から構成されている。担当章「学校心理学における学校への援助に関する研究」で学校心理学に関する研究の動向をレビューし、「学校心理学の「最前線」と学校教育の可能性 」では、学校心理学が学校教育を促進する可能性を論じた。（編著者：水野委治久；監修：石隈利紀）

49. 教育心理学	共著	2009 年	新曜社, 120-123, 146-149, 154-157, 212-215	本書は教育心理学について幅広くキーワードの解説を行ったものである。学校心理学に関連する項目「心理教育的アセスメント」「学校生活での苦戦」「スクールカウンセラー」「支援ネットワーク」を担当し、教育実践における援助サービスについて論説した。 （編著者：二宮克美・子安増生）
50. Intelligent testing: Integrating psychological theory and clinical practice	共著	2009 年	Cambridge University Press, 183-190	知能のアセスメントにおける世界的権威である Dr. Alan Kaufman の実績、世界への影響、人柄についての論考をまとめたものであり、Dr. Robert Sternberg などこの領域を代表する研究者が寄稿した。担当章 “Dr. Alan Kaufman’s contribution to Japan: K-ABC, intelligent testing, and school psychology”では日本版Ｋ－ＡＢＣ、日本における「賢いアセスメント」、学校心理士を通して、Dr. Alan Kaufman の日本の学校心理学への影響を論じた。 （編著者：Kaufman, J.）
51. 親、教師、言語聴覚士が使える吃音ワークブック	共著	2010 年	解放出版社, 129-140	本書は、吃音の子どもに関わる保護者、教師、専門家のために、援助実践の方法や例を示すものである。担当章「子どもが生きることをどう援助できるか～吃音への援助から学ぶ」において、一人の人間として、吃音の子どもと、危機感を共有し、責任を共有し、希望を共有することを論じた。 （編著者：伊藤伸二・吃音を生きる子どもに同行する教師の会）
52. 日本版 ＷＩＳＣ-Ⅳ理論・解釈マニュアル	共著	2010 年	日本文化科学社	本書は、子どものための個別式知能検査「日本版ＷＩＳＣ-Ⅳ」の理論的基盤および解釈の方法について述べたマニュアルである。ウエクスラー検査の歴史、新しい認知理論と解釈、標準化調査に基づく信頼性・妥当性の紹介などから構成される。 （訳編著者：Wechsler, D., 上野一彦・藤田和弘・前川久男・石隈利紀・大六一志・松田修）
53. 日本版 ＷＩＳＣ-Ⅳ実施・採点マニュアル	共著	2010 年	日本文化科学社	本書は、子どものための個別式知能検査「日本版ＷＩＳＣ-Ⅳ」の実施と採点のためのマニュアルである。個別式知能検査の実施の際の留意点、本検査実施・採点の留意点、そして各下位検査の実施・採点の具体的な方法について、述べられている。 （訳編著者：Wechsler, D,上野一彦・藤田和弘・前川久男・石隈利紀・大六一志・松田修）
54. 総合教育技術 5 月号増刊　最新教育基本用語 2011～2012 年版	共著	2011 年	小学館, 336-351	本書は、新学習指導要領に対応して教育実践の基本用語について論説したものである。担当の「学校カウンセリング」では、学校心理学に基づき、いじめなどの問題、アセスメントやコンサルテーションなどの実践、行動療法などのカウンセリングの理論等に関する用語の定義と教育実践について説明した。
55. 学校心理学ガイドブック第 3 版	共著	2012 年	風間書房, 5-15, 45-60, 193-203, 223-233	本書は、学校心理士をめざすスクールカウンセラーや教員のためのガイドブックであり、学校心理学の基礎、学校心理士の職務内容、学校心理士に必要とされる基礎的知識からなる。担当章は「学校心理学と学校心理士」（学校心理士の意義と特徴、学校心理士の活動の概要、学校心理学とその近辺領域の異同と学校心理士の活動の特

				色)、「学校心理学」、「基礎実習１：心理教育的アセスメント基礎実習」「学校心理士をどう養成するか―大学院における関連科目「新基準」誕生の過程と意義―」であり、責任編集も務めた。(責任編集者：塩見邦夫・石隈利紀・小野瀬) (編著者：学校心理士資格認定委員会)
56. 生涯発達の中のカウンセリングⅡ　～子どもと学校を援助するカウンセリング	共著	2013 年	サイエンス社, i-xii	本書は、学校カウンセリングに関する学校心理学の枠組みからの本である。子どもへの援助、学級レベルでの援助、学校レベルでの援助について、援助サービスの方法と実践について、「実践家・研究者」らが執筆している。担当の「まえがき」では本書の成果をまとめ、生涯発達を支援する視点で「カウンセリング」を論じている。(編著者：石隈利紀・藤生英行・田中輝美)
57. 実践チーム援助－特別支援教育編－	共著	2013 年	図書文化	本書は前著「援助チーム入門」の特別支援教育編である。特別支援におけるチーム援助について豊富な事例を用いてわかりやすく解説をした。また「援助チームシート」「援助資源チェックシート・ネットワーク版」「個別の支援計画シート」の使い方や記入の例を示し実践にすぐ役立てられるように工夫を行った。特別支援教育をチーム援助で実施するための解説書である。 (共著者：田村節子・石隈利紀)
58. よくわかる学校心理学	共著	2013 年	ミネルヴァ書房	本書は、学校心理学の基礎的な事項についてわかりやすく解説する本である。第１部理論編、第２部実践編からなる。第１部では、学校心理学の理論的基盤や関連する学問領域について論説する。第２部では、学習面・心理社会面・進路面・健康面の援助、さまざまな援助者等について論考した。 (編著者：水野治久・石隈利紀･田村節子・田村修一・飯田順子)
59. 高等学校の特別支援教育 Q&A―親・教師が知っておきたい 70 のポイント	共著	2013 年	金子書房	本書は、発達障害など特別な援助ニーズのある高校生を援助するために、保護者や教師が知りたいことについてまとめた。具体的には、発達障害や特別支援教育の基礎知識、教科指導・生活指導・進路指導のコツ、人間関係の問題への援助などについて、ていねいに解説した。(編著書：柘植雅義・石隈利紀)
60. 学校教育と心理教育的援助サービスの創造	共著	2014 年	学文社	本書は、子どもの学校生活の質を向上させるための心理教育的援助サービスの理論と実践モデルについて論考した。とくに心理教育的援助サービスのモデル、授業における心理教育的援助サービス、学校の組織を活用した援助サービスのシステムに焦点をあてて考察した。 (共著者：石隈利紀・家近早苗・飯田順子。監修：小島弘道)
61. 世界の学校心理学事典	共著	2014 年	明石書店	本書は"Handbook of International School Psychology"の翻訳書である。世界の学校心理学の動向と 45 の国の学校心理学の現状を紹介する本の全体の監訳を担当した。各国の学校心理学について，①学校心理学が展開される環境、②学校心理学の起源・歴史・現状、③学校心理士の組織的基盤、④学校心理士の養成、⑤学校心理士の役割・機能・責任、⑥学校心理学に影響を与える今日的課題をめぐり論考した。また、

				本の終わりに、各国の学校心理学の共通点・相違点等もまとめた。 （編者:Jimerson, S., Oakland, T.,　& Farrell, P.） （監訳者：石隈利紀・松本真理子・飯田順子）
62. エッセンシャルズ：ＫＡＢＣ－Ⅱによる心理アセスメントの要点	共著	2014 年	丸善出版	本書は、"Essentials　of KABC-II Assessment"の翻訳である。KABC－Ⅱの検査の結果の解釈、質的観察の指標、障害のある子どもの検査結果についての原書を翻訳すると同時に、日本KABC－Ⅱを利用した事例も掲載した。KABC－Ⅱの活用のガイドブックである。（原著者:Kaufman, A. S., Lichtenberger, E. O., Fletcher-Janzen, E., &Kaufman, N. L.） （監修者:藤田和弘・石隈利紀・青山真二・服部環・熊谷恵子・小野純平）
63. 日本版 ＷＩＳＣ-Ⅳ補助マニュアル	共著	2014 年	日本文化科学社	本書は、日本版ＷＩＳＣ－Ⅳを有効に活用するためのマニュアルである。特に注意が必要な下位検査の採点基準と採点例の詳細、検査の新しい指標（ＧＡＩ、ＣＰＩ）の解説と換算などから構成される。（共編著者：Wechsler, D, 上野一彦・藤田和弘・前川久男・石隈利紀・大六一志・松田修）
64. ライフスキルを高める心理教育～高校・サポート校・特別支援学校での実践	監修・共著	2016 年	金子書房	本書は、「自己を知る」「他者・集団とつきあう」「学習を工夫する」「キャリアについて考える」ライフスキルを高める授業実践の理論と実際を示す。生徒の問題の予防的観点からの心理教育についてのガイドブックである（監修、共著：石隈利紀、共編著者：熊谷恵子・田中輝美・菅野和恵）
65.学校心理学ハンドブック第２版―「チーム」学校の充実をめざして	責任編集	2016 年	教育出版	「学校心理学とは何か」について論じて、「学校心理学の理論」として「学校教育学的基盤」「心理学的基盤」「心理教育的援助サービスの方法と技法」をとりあげ、さらに「学校心理学の実践」として子どもや家族・地域への援助等をとりあげた。（共同責任編集：石隈利紀・大野精一・小野瀬雅人・松本真理子・東原文子・山谷敬三郎・福沢周亮
66. 石隈・田村式援助チームによる子ども参加型チーム援助―インフォームドコンセントを超えて―	共著	2017 年	図書文化	「子ども参加型チーム援助とは」「子ども参加型チーム援助の進め方」「子ども参加型チーム援助の事例」「ロールプレイを用いた研修」の章からなる。石隈・田村式援助シートを活用するチーム援助の理論と実践に関するガイドブックである。（共著者：田村節子・石隈利紀）

67. 学校教育相談の理論と実践	共著	2018 年	あいり出版	理論編として日本の学校教育相談の歴史と意義、そして今後のあり方について論じる。 さらに実践編として、発達障害のある児童生徒への支援や教師のキャリア発達について論じる。担当の「日本の学校心理学と学校教育相談」では学校心理士の心理教育的援助サービスを軸に、学校教育相談活動への学校心理学の貢献と学校教育相談実践の学校心理学の理論構築への貢献について論じた。（共著者：大野精一・藤原忠雄・小林幹子、都丸けい子、新井肇、三川俊樹、納富恵子、西山久子、石隈利紀、今西一仁、高橋あつ子、金山健一、中原美恵、佐藤三智子、田邊昭雄、佐藤一也、茅野眞紀子）
68. 公認心理師エッセンシャルズ	共著	2018 年	有斐閣	公認心理師の学びとして「心理学基礎科目」「心理学発展科目」「実践演習科目」を論じ、また大学院で学ぶことを論じた。そして公認心理師の職責として、守秘義務等を説明し、各分野における公認心理師の業務について説明した。さらに公認心理師の仕事に関係する関係行政と法律について説明した（共著者：子安増夫、丹野義彦、石垣琢磨、石隈利紀、金井篤子、菊池安希子、藤岡淳子、細野正人、松野俊夫、宮脇稔）
69. 新版：石隈・田村式援助チームによるチーム援助入門：学校心理学・実践編	共著	2018 年	図書文化	学校心理学の実践の軸であるチーム援助に関して、チーム援助の考え方、石隈・田村式援助シートの使い方、チーム援助の進め方について解説した。そしてチーム援助の実践を 7 例紹介して考察した。 （共著者：石隈利紀、田村節子）
70. チーム学校における効果的な援助―学校心理学最前線	共著	2018 年	ナカニシヤ出版	本書は、チーム学校を支える学校心理学の研究と実践について最新の研究動向と実践のモデル・実践事例から得られた、心理教育的援助サービスへの示唆と今後の課題について論じたものである。三段階の心理教育的援助サービス（一次的援助サービス、二次的援助サービス、三次的援助サービス）の視点から構成されている。担当章「チーム学校時代の学校心理学」では、チーム学校における学校作りと教員に求められることを論じた（共著者：水野治久・家近早苗・石隈利紀・横島義昭、萩原明子、中井大介、小貫悟、小泉令三、今西一仁、樽木靖夫、西山久子、武蔵由佳、河村茂雄、大河原美以、長谷川翠、戸田有一、五十嵐哲也、相樂直子、半田一郎、飯田順子、上村恵津子、押切久遠、本田真大、田村節子、四辻伸吾、山本博樹、松本真理子、竹内和雄、永井智、石津健一郎、大久保智生、木村真人、鈴木庸裕）
71. 公認心理師の基礎と実践 18：教育・学校心理学	共著	2019 年	遠見書房	新しく公認心理師養成カリキュラムの必須科目となった「教育・学校心理学」について、まず担当章でその定義を提案した。1 部では教育・学校心理学の理論として、子どもの発達課題・教育課題の理解と援助、スクールカウンセリングの枠組み、多様な援助者、3 段階の心理教育的援助サービス

				について解説した。2 部では子どもと学校を援助する実践として、発達障害、不登校、いじめ、非行、学校の危機などの「問題状況」をとりあげ対応を検討するともに、学級づくり、学校づくり、地域ネットワークづくりを検討した。担当した最終章で「教育・学校心理学と公認心理師の実践についてまとめの考察をした。（共著者：石隈利紀、松本真理子、増田健太郎、大河原美以、田村節子、水野治久、小野純平、本間友巳、濱口佳和、押切久遠、窪田由紀、伊藤亜矢子、家近早苗、石川悦子）
72.　新･学校心理学が変える新しい生徒指導	共著	2020 年	学事出版	生徒指導、教育相談・カウンセリング、特別支援教育、社会学、心理学など様々な分野から取り組まれてきた子どもをめぐる問題に、学校教育と心理学を融合・統合し、チームでサポートする「学校心理学」のアプローチで生徒指導を劇的に変える方法について説明した。（編著者：山口豊一、石隈利紀）
73.　教育･学校心理学	共著	2021 年	北大路書房	心理学を活かした仕事を目指す高校生・大学生・社会人、そして、進路指導や心理学教育に携わる教育関係者に向けて、教育・学校心理学を解説した。また教師やスクールカウンセラーなど「現場の声」も交えながら、子どもの学びと育ちの今を紹介した。（監修者：太田信夫、編著書：石隈利紀、小野瀬雅人）
74.　スクールカウンセリングのこれから	共著	2021 年	創元社	子どもの成長を援助する「学校の力」を再発見し、再構築することを目指すものであり、教師が保護者やスクールカウンセラーらと連携して子供の成長を援助する「スクールカウンセリングの今と未来」について、現場の教師やスクールカウンセラーと一緒に考えるヒントを提供した。内容については 1.スクールカウンセリングとは 2.学校教育の現場を生かして 3.子供の援助ニーズに応じて 4.援助するスキルを磨いて 5.子どもの苦戦に応じて 6.チーム学校で、という 6 つのセクションからなる 27 章で構成され、カウンセリングの一般論ではなく、学校教育の援助サービスに焦点を当てた。（共著者：石隈利紀、家近早苗）
75.　日本版 WISC-V 理論･解釈マニュアル	共著	2022 年	日本文化科学社	WISC-IV 知能検査の改訂版である。今回の改訂で考慮された、知能および認知能力のさまざまな構造モデル、神経発達学的研究と神経認知学的研究の成果、心理測定結果、臨床的有用性、実践家の実際のニーズについて述べた。そして検査の構成も含めて大きな変更の基盤となる理論と結果の解釈について解説した（原著者：David Wechsler、訳編著：上野一彦、石隈利紀、大六一志、松田修、名越斉子、中谷一郎）
著書:計 75 冊				
（学術論文） 1. Integration　of the literature on the intelligence of Japanese children and analysis of the data from a	共著	1989 年	School Psychology International, 10, 173-183.	日本の子どもの知能についての研究をレビューし、日本の子どもの知能がアメリカ人の子どもの知能より高いという知見が過大

sequential and simultaneous Perspective.				評価であるという示唆を得た。さらに日本の子どもは情報を処理して問題解決を行う際継次処理より同時処理の方が優れているという仮説を検証し、その仮説が支持された。（共著者：Kaufman. A. S., McLean, J. E., Moon, S.B., & Ishikuma, T.）
2. Amazingly short forms of the WAIS-R.	共著	1991 年	Journal of Psychoeducational Assessment, 9, 4-15.	ＷＡＩＳ－Ｒの各下位検査の実施・採点時間と実施の順番、および測定する内容を検討し、ＷＡＩＳ－Ｒの新しい短縮版を作成した。2 下位検査版として「知識と絵画完成」、3 下位検査版はそれに「数唱」が加え、そして 4 下位検査版として「算数、類似、絵画完成、数唱」であった。どの短縮版も実施時間が 20 分以下で、信頼性・妥当性が約 90 分かそれ以上であった。（共著者：Kaufman, A. S., & Ishikuma, T.）
3. 「三匹の子ぶた」に関する心理学的研究－物語の構造と伝えられる価値の分析を中心に－	共著	1992 年	筑波大学心理学研究, **14**, 45-53	有名な物語『三匹の子ぶた』の日本語版 5 編と英語版 4 編を検討し、様々なストーリー展開があることが明らかにし、日本語版と英語版で強調される価値観を検討した。「勤勉」と「利口さ」は双方で伝えられていたが、日本語版では狼に対する３匹の子ぶたの「協力」が描かれているのに対し、英語版ではより強い家をめぐる３匹の「競争」が描かれていることが明らかになった。（共著者：福沢周亮・小野瀬雅人・石隈利紀）
4. 集団行動に困難を示す小学生を指導する学級担任へのコンサルテーション －学校心理学の枠組みから－	共著	1992 年	筑波大学臨床心理学論集, **8**, 29	学校心理学の枠組みからコンサルテーションについて解説し、集団行動に困難を示す小学生 4 年生男子の指導に関する学級担任へのコンサルテーションの事例を検討した。学級担任がコンサルタント（心理教育相談室の相談員）の援助を得て対象児の状況のアセスメントを行い、対象児の指導についての方略を検討するプロセスを議論した。（共著者：大友秀人、石隈利紀）
5. LD の援助システム－スクール・サイコロジストの立場から－	単著	1993 年	LD 研究と実践, **1**, 53-62	LD（学習障害）の援助システムとして、アメリカ合衆国の小学校における援助チームの実践と個別教育計画チームの実践を紹介した。そして、LD の援助システムにおけるスクールサイコロジストの役割とシステムの日本での活用について検討した。援助チームの意義と問題点を明らかにした。
6. 外国人留学生相談の実態	共著	1993 年	カウンセリング研究, **26**, 146-155	留学生数の多い 22 の国立私立大学の留学生センター・学生相談室等のカウンセラー・アドバイザーを対象に、留学生に対する相談活動の実態と相談の具体的事例などについて質問紙法で調査研究した。その結果、相談内容は言語問題と経済問題が多く、人間関係や文化の問題は比較的少なかった。留学生の相談事例は深刻な問題を扱っており、専任のカウンセラー・アドバイザーの充実の必要性が明確になった。（共著者：松原達哉・石隈利紀）
7. 日本版Ｋ－ＡＢＣの構成概念的妥当性に関する検討	共著	1994 年	筑波大学リハビリテーション研究, **3**, 11-16	幼児・児童用知能検査であるＫ－ＡＢＣの日本版の構成概念的妥当性について、5 歳から 12 歳半の 174 名の子どもを対象にＫ－ＡＢＣを実施して、検討した。その結果の因子分析により、11 の下位検査が、Ｋ

				－ＡＢＣが測定しようとしている概念（継次処理、同時処理、習得度）を測定していることが支持され、Ｋ－ＡＢＣの３尺度の構成の通りに下位検査がそれぞれの因子に高く負荷していることが確認された。（共著者：小野純平・松原達哉・藤田和弘・前川久男・石隈利紀）
8. 不合理な信念測定尺度（JIBT-20）の開発の試み	共著	1994 年	ヒューマンサイエンスリサーチ, **3**, 43-58.	松村（1991）による論理療法の中心的な概念である「不合理な信念」の尺度の短縮版（20 項目）を開発した。まず、専攻研究から 84 項目を収集し大学生 546 名に実施して、因子分析などの結果から、5 因子各 4 項目計 20 項目の短縮版を作成した。さらにこの短縮版を大学生 420 名と心身症患者 90 名に実施した結果、不合理な信念を強くもつ者が社会不安が高いこと、心身症患者は不合理な信念が強いことが明らかになり、この尺度の妥当性が支持された。（共著者：森治子・長谷川浩一・嶋田洋徳・坂野雄二・石隈利紀）
9. A Horn analysis of the factors measured by the WAIS-R, Kaufman Adolescent and Adult Intelligence Test(KAIT), and two new brief cognitive measures for normal adolescents and adults.	共著	1994 年	Assessment, 1, 353-366.	16 歳から 83 歳までの 255 名に、ＷＡＩＳ－Ｒ、ＫＡＩＴ、Ｋ－ＦＡＳＴ、Ｋ－ＳＮＡＰの４つの知能検査を実施し、成人の知能について Horn のモデルから検討した。これらの結果の因子分析から、結晶性知能、流動性知能、短期記憶、視覚化・流動性知能の 4 因子が抽出された。この結果から、ＷＡＩＳ－Ｒの動作性尺度は視覚化・流動性知能を測定しており、言語性尺度は結晶性知能を測定していることが示唆された。（共著者：Kaufman, A. S., & Kaufman, N. L., Ishikuma, T.）
10. 日本の学校教育におけるスクールカウンセラーの現状と課題－学校心理学の視点からスクールカウンセラーの事例を検討する－	単著	1996 年	こころの健康, **11**, 36-48	3 人のスクールカウンセラーの実践を学校心理学の枠組みから検討した。その結果３人は、「私立中学校の教育援助スタッフとしての心理臨床家」「公立学校に勤務する学校のカウンセラー」「公立学校に派遣された臨床心理士」として分類された。子どもに対してカウンセリングを行い、教師に対してコンサルテーションを行うことでは三者とも共通していたが、保護者への援助においては、カウンセリングを行うかどうかなど違いが見られた。
11. 学校心理学に基づく学校カウンセリングとは	単著	1996 年	カウンセリング研究, **29**, 226-239	学校カウンセリングを、すべての子どもに対する心理教育的援助サービスととらえ、学校心理学の枠組みから学校カウンセリングの基礎概念とスクールカウンセラーの役割について論説し、教科面と生活面における指導サービスと心理教育的援助サービスの二分法について考察した。学校カウンセリングが、教師と保護者とカウンセラーが協力して、学校生活という場において、子どもの問題状況の解決を援助する活動であることが強調された。
12. アジア系留学生の被援助志向性と適応に関する研究	共著	1998 年	カウンセリング研究, **31**, 1-9	アジア系留学生 239 名を対象とした質問紙調査で、留学生の被援助志向性と学習・研究面、心身健康、対人関係、日本文化、住居・経済の領域における適応との関係を検討した。その結果、留学生の被援助志向性は、学習・研究、対人関係、住居・経済の領域における適応と関連が見られた。また

				留学生は、専門的ヘルパーや役割的ヘルパーに相談する傾向が強かった。留学生への援助において、被援助志向性を考慮する必要性が示唆された。 （共著者：水野治久・石隈利紀）
13.アメリカ合衆国における個別教育計画（ＩＥＰ）に基づく障害児の援助モデル－学校心理学の枠組みから－	共著	1999 年	特殊教育学研究, **37** (2), 81-91	アメリカ合衆国における学校心理学に基づく特殊教育サービスを検討し、日本の将来の特殊教育サービスのモデルを考察した。とくに心理教育的援助サービスの専門家であるスクールサイコロジストの役割、個別教育計画の意義、チーム援助について議論した。アメリカのシステムは、教育の公開性、保護者と複数の専門家によるチーム援助の点において、日本の学校教育に示唆を与える。（共著者：石隈利紀・永松裕希・今田里佳）
14. 看護職の自動思考とバーンアウトとの関係	共著	1999 年	カウンセリング研究, **32**, 115-123	大学病院勤務の看護者 136 名を対象とした質問紙調査で、本研究で作成した自動的思考の尺度の信頼性と妥当性を検証した。次に大学病院勤務の看護者 341 名を対象とした質問紙調査を行った。その結果、自動的思考が強くなるほど、バーナアウトの主症状である「情緒的消耗感」、「脱人格化」、「個人的達成感の低下」に陥りやすいことが示された。看護者のバーナウトの対処として、自動的思考への認知療法の可能性が示唆された。（共著者：岡田佳詠・石隈利紀）
15. 被援助志向性、被援助行動に関する研究の動向	共著	1999 年	教育心理学研究, **47**, 530-539	カウンセリング等の援助を受ける被援助者がどのように援助を求めるかの「被援助志向性」の研究の動向を知るために、米国における過去 30 年間の研究成果が展望された。その結果、被援助志向性の研究は、①デモグラフィック要因、②ネットワーク変数、③パーソナリティ変数、④症状との関連の 4 領域に集約された。最後に、わが国における専門・職業的心理学の構築の必要性が指摘された。（共著者：水野治久・石隈利紀）
16. 養護教諭の心理教育的援助サービス	共著	2000 年	教育相談研究, **38**, 49-60	子どもに対する養護教諭の関わりについて、心理教育的援助サービスの観点から調査を行い分析した。心理教育的援助サービスの担い手としての養護教諭の重要性が確認された。 （共著者：石隈利紀・宮本知弘・小野留美子）
17. アジア系留学生の専門的ヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的変数の関連	共著	2000 年	教育心理学研究, **48**, 165-173.	専門的ヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的要因の関連を明らかにするために 264 名の留学生を対象に質問紙調査が実施された。その結果、一部の領域を除いて、被援助志向性とソーシャル・サポート、援助に対する不安との関連が認められた。被援助志向性を高めるためには、サポートを供給しながらも、援助に対する不安に配慮する必要があることが明らかになった。（共著者：水野治久、石隈利紀）
18. 教師からのサポートの種類とそれに対する母親のとらえ方の関係に関する研究—特別な教育ニーズを持つ子どもの母親に焦点を当てて—	共著	2000 年	教育心理学研究, **48** , 284-293	特別な教育ニーズを持つ子どもの母親に対する教師からのサポートの種類とそれに対する母親のとらえ方を明らかにした。その結果、通常学級の母親は指導的サポートよりも情緒的サポートや道具的サポートを援助的と評価する傾向があり、LD 及びその周辺の子どもの母親は、道具的サポート、

				情緒的サポート、指導的サポートの順に援助的と捉えやすいことが明らかになった。（共著者：上村惠津子・石隈利紀）
19. アジア系留学生の専門的ヘルパー、役割的ヘルパー、ボランティアヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的変数の関連	共著	2001 年	教育心理学研究, **49** , 137-145	専門的ヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的要因の関連を明らかにするために 264 名の留学生を対象に質問紙調査が実施された。その結果、一部の領域を除いて、被援助志向性とソーシャル・サポート、援助に対する不安との関連が認められた。被援助志向性を高めるためには、サポートを供給しながらも、援助に対する不安に配慮する必要があることが明らかになった。（共著者：水野治久・石隈利紀）
20. 障害児を持つ親に関する研究の動向―教師からの有効な支援の方法を探る視点から―	共著	2001 年	筑波大学心理学研究, **23**, 187-199	障害児を持つ親・家族に関する研究、及び親・家族への支援とその受け入れに関する研究を概観した。その結果、ストレス研究からは、学校自体がストレッサーになる可能性が示唆されていた。ソーシャル・サポート研究からは、サポートの提供者が意図するとおりに受け手に受け止められるとは限らないこと、サポート源により求めるサポートの種類が異なることが示された。これらの研究結果から、保護者と教師がパートナーシップを作るには、サポート源やサポートの種類、サポートを提供する場面など、支援に関わる要因に焦点を当て有効な支援を検討する必要があると考えられた。（共著者：石隈利紀・上村惠津子）
21. 中学校における学級集団を対象としたスキルトレーニング―自己効力感がスキル学習に与える影響―	共著	2001 年	筑波大学心理学研究, **23**, 179-185.	学級集団を対象としたスキルトレーニングの効果と、自己効力感がスキル学習に与える影響を検討することを目的に中学 1 年生 3 クラス 94 名を対象に、コミュニケーションスキルトレーニングを実施した。その結果、コミュニケーションスキルの得点が有意に上昇した。またコミュニケーションスキルの得点の変化において自己効力感の影響がみられた。（共著者：飯田順子・石隈利紀）
22. 教師からのサポートの種類と父親のとらえ方の関係―特別な教育ニーズを持つ子どもの父親に焦点を当てて―	共著	2001 年	LD 研究, **10** (1), 59-69	特別な教育ニーズを持つ子どもの父親に対する教師からのサポートの種類とそれに対する父親のとらえ方を明らかにした。質問紙調査の結果、通常学級の父親、LD 及びその周辺の子どもの父親ともに、報告的サポート、道具的サポート、評価的サポートの順に援助的と捉えやすいことが明らかになった。これらの結果から、父親に対しては、子どもに対して教師が行っている援助について具体的に伝え、信頼関係を構築することが有効だと考えられた。（共著者：上村惠津子・石隈利紀）
23. 予防的教育相談の学校心理学的研究―A 子への二次的援助サービスの実践を通して―	共著	2001 年	教育相談研究, **39**, 1-9	本研究は、中学生の悩みを明らかにすること、そして援助チームを活用したチーム援助を通して予防的教育相談の在り方を明らかにすることを目的とした。生徒の悩みを明らかにするために、中学生 613 名を対象に質問紙調査を実施した。また、A 子に対するチーム援助を予防的援助サービスの視点から分析した。その結果、中学生は、学習面に多く悩んでいることが明らかになった。また、援助チームを活用したチーム援助が、予防的教育相談に効果的であることが明らかになった。（共著者：山口豊一・石隈利紀）

24. 養護学校における「個別の指導計画」の作成に関する研究	共著	2001 年	教育相談研究, **39**, 11-17	養護学校における個別の指導計画作成に焦点をあて、その作成のプロセスについて、協議組織、保護者の参加形態という側面から調査し検討した。その結果、協議組織においては、構成人数が多くなるにつれ、満足度が下がる傾向があることが示された。適正人数を考慮することが組織の選択において重要であると推察された。また、保護者の参加形態は、学校内で作成・検討した指導計画を保護者に報告するという形態であった。保護者の参加をより積極的な方向で検討していく必要があると考えられた。（共著者：上村惠津子・石隈利紀・永松裕希）
25. 留学生のソーシャルサポートと適応に関する研究の動向と課題	共著	2001 年	コミュニティ心理学研究, **4**, 132-143	留学生のソーシャルサポートと適応に関する論文について、1968 年～1999 年の論文が概観された。その結果、ソーシャルサポートと適応の関連は概ね認められたが、一部には関連が認められなかった研究、両者に負の関連が認められた研究があった。この結果から、留学生が周囲のサポート源にどのように援助を求めるかについて研究する必要性が示唆された。（共著者：水野治久・石隈利紀）
26. 不登校児や LD（学習障害）児のための援助チームに関する研究― 小学校におけるスクールカウンセラーの効果的な活用をめざして―	単著	2001 年	安田生命社会事業団研究助成論文集, **36**, 18-28	不登校やＬＤの子どもの援助チームに関する教師の態度やチーム援助のコーディネーションについて明らかにすることをめざして、スクールカウンセラーが配置されている小学校 48 校の教師やスクールカウンセラーら 443 名を対象に調査を行った。その結果、担任のチーム援助志向性は、期待と不安の二次元で説明できること、チーム援助のコーディネーションは、援助チームレベルとシステムレベルで説明できることが分かった。
27. 指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究―バーンアウトとの関連に焦点をあてて	共著	2001 年	教育心理学研究, **49**, 438-448	本研究は、指導・援助上の困難に直面した教師が、どのように他の教師に援助を求めるかについて明らかにし、加えてバーンアウトとの関連について明らかにすることを目的とした。中学校教師 155 名の回答を分析の結果、男性教師の場合は、教師自身の指導・援助に対する同僚からの批判を感じている人と、同僚に助けてもらうことに抵抗のある人のバーンアウト得点は深刻であった。そして、同僚からのソーシャル・サポートがある人のバーンアウト得点は低かった。女性教師の場合は、生徒からの反抗の多い教師と、同僚に助けてもらうことに抵抗のある人のバーンアウト得点は深刻であった。（共著者：田村修一・石隈利紀）
28. IEP 作成プロセスにおける保護者の参加に関わる研究の動向―過去 10 年間の米国の論文のレビューから―	共著	2002 年	筑波大学心理学研究, **24**, 221-230	ＩＥＰ作成過程における保護者の参加に関する米国の論文をレビューし、保護者に対する教師の支援方法を具体的に構築するための研究の方向性を探った。その結果、保護者への配慮は、共感、傾聴などのコミュニケーションスキルが基盤となっていること、この基盤の上に問題解決的アプローチ、生態学的モデルによる分析といった方法の有効性が指摘されていること、さらに保護者の参加を促す具体的な工夫が豊富に構築されていることが示された。（共著者：石隈利紀・上村惠津子）

29. 中学生の学校生活スキルと学校における活動状況との関連― 自己効力感と学業成績に焦点を当て―	共著	2002 年	教育相談研究, **40**, 13-23	中学生の学校生活スキルと学校での活動状況の関連を検討するため、中学生 731 名を学校生活スキルの得点パターンで、「中間群（MS)」「自己学習スキル課題群(LSS)」「コミュニケーションスキル課題群(LCS)」「高スキル群(HS)」「低スキル群(LS)」に分類した。自己効力感では、HS 群が LSS 群より、MS 群がＬS 群より、有意に得点が高かった。学業成績では、HS 群が LCS 群より有意に得点が高かった。（共著者：飯田順子・石隈利紀）
30. 高校におけるチーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力および権限の研究― スクールカウンセラー配置校を対象として―	共著	2002 年	教育心理学研究, **50**, 204-214	高校における援助チームおよび援助システムに関するコーディネーション行動と,コーディネーターを支える能力に関する調査研究を行い,コーディネーション行動の構造や学校における役割分担について明らかにした。（共著者：瀬戸美奈子・石隈利紀）
31. 中学生の学校生活スキルに関する研究― 学校生活スキル尺度（中学生版）の開発 ―	共著	2002 年	教育心理学研究, **50**, 225-236	Darden 他のライフスキル尺度、教師 17 名の半構造的面接、中学生 108 名の自由記述から学校生活スキル項目を収集し、内容的妥当性の検討と予備調査を行った。次に、中学生 809 名のデータを基に因子分析を行った結果、自己学習スキル、進路決定スキル、集団活動スキル、健康維持スキル、同輩とのコミュニケーションスキルの５つの下位尺度、計 54 項目からなる学校生活スキル尺度（中学生版）が開発された。（共著者：飯田順子・石隈利紀）
32. 中学校教師の被援助志向性と自尊感情の関連	共著	2002 年	教育心理学研究, **50**, 291-300	本研究は、教師の「被援助志向性」と「自尊感情」との関連を明らかにし、教師への効果的な援助のあり方を検討した。その結果、女性教師は、男性教師に比べ「被援助志向性」が高く、男性教師は、女性教師に比べ「自尊感情」が高かった。「被援助志向性」と「自尊感情」は共に、年齢による差はなかった。また、45 歳以下の男性教師においては、「自尊感情」が高いほど「被援助志向性」が高い傾向が見られた。一方、41 歳以上の女性教師においては「自尊感情」が高いほど、「被援助志向性」が低い傾向が見られた。この結果から、教師へのサポートをどのように提供したらよいかについて考察された。（共著者：田村修一・石隈利紀）
33. 中学生のスキルを測定する尺度の開発に関する研究の動向	共著	2003 年	筑波大学心理学研究,**33,** 213-228	本研究は欧米におけるスキル尺度開発に関連する 34 の研究論文のレビューを行った。文献研究の結果、社会的スキルの測定尺度 9、スタディスキル 2、ストレスコーピング 1、意思決定スキル 1、問題解決スキル 1、スクール・サバイバルスキル 1、ライフスキル 4 が得られた。（共著者：飯田順子・石隈利紀）
34. 学校カウンセリングの現状と課題 ― 一人ひとりの子どもの力と援助ニーズに応じる学校教育サービスをめざして	単著	2003 年	明治学院大学心理臨床センター研究紀要, **1**, 15-28.	学校カウンセリングの現状と課題について、学校心理学の枠組みから論じた。カウンセリングを学校教育サービスととらえ、教師とスクールカウンセラーらのチーム援助が大切であることが強調されている。
35. 中学校における援助サービスのコーディネーション委員会に関する研究	共著	2003 年	教育心理学研究, **51**, 230-238.	非行問題が頻発する中学校のコーディネーション委員会について、相談事例を検討する中から､コーディネーション委員会は、マネジメ

				ントの促進機能、コンサルテーションおよび相互コンサルテーション機能、学校・学年レルの連絡・調整機能をもつことを明らかにした。（共著者：家近早苗・石隈利紀）
36. 教師・保護者・スクールカウンセラーによるコア援助チームの形成と展開 ― 援助者としての保護者に焦点をあてて―	共著	2003 年	教育心理学研究, **51**, 328-338	本研究では、不登校生徒 15 事例に対する援助チームの実践をもとに、①保護者を含む援助チームの実践モデルを提案し、保護者の状況に応じた援助チームの形態を分類した。保護者は、援助を受ける側と同時に援助を提供する側にも位置づけた。その結果、保護者は来談回数により 4 タイプに分かれ、それぞれの代表的な事例をあげて考察を加え、さらに保護者のタイプ別の援助チームの特徴や実践に当たっての問題点を分析検討した。（共著者：田村節子・石隈利紀）
37. 中学校におけるチーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力および権限の研究 ― スクールカウンセラー配置校を対象として―	共著	2003 年	教育心理学研究, **51**, 378-389	中学校における援助チームおよび援助システムに関するコーディネーション行動と,コーディネーターを支える能力に関する調査研究を行い,コーディネーション行動の構造や学校における役割分担について明らかにした。（共著者：瀬戸美奈子、石隈利紀）
38. Policy and direction of development of counseling profession in Japan. Konvensi National Bimbingan Dan Kouseling	単著	2003 年	Proceeding of National Convention on Guidance and Counseling, 18-22	インドネシアでの国際カウンセリング大会における招待講演の論文集に掲載されたものである。日本の教育システムおよび子どもの問題（不登校やいじめ）を紹介し、日本における「カウンセリング」サービスは教師が中心に関わることや「学校心理士」の認定について論じた。教師のカウンセリングサービスの役割のシステム化とカウンセリングの専門家の養成の必要性が述べた。
39. 子どもの苦戦へのチーム援助	単著	2004 年	Ｋ－ＡＢＣアセスメント研究, **5**, 79-93.	子どもの学校生活を援助する学校心理学の枠組みに基づき、学習面、心理社会面、進路面、健康面全体の援助サービスをチーム行うことを論じた。その際、子どもの知的能力の発達や特徴についてのＫ－ＡＢＣの検査結果が子どもの学習スタイルに応じた指導方法の提案につながることを具体的に論じた。
40. 中学生の悩みの経験・深刻度と被援助志向性の関連－学校心理学の視点を生かした実践のために	共著	2004 年	カウンセリング研究, **37**, 241-249.	中学生 405 名を対象に悩みの経験度、深刻度と中学生を取り巻くヘルパーへの被援助志向性が検討された。悩み・深刻度と被援助志向性の関連は、一部のヘルパー、領域で認められた。悩み・深刻度得点が高いほど被援助志向性得点が高かった。悩みが高くとも被援助志向性に関連しないことも確認されたので、ピアサポート、チーム援助の必要性が示唆された。（共著者：山口豊一・水野治久・石隈利紀）
41. わが国の子どもに対するソーシャル・サポート研究の動向と課題 ―学校心理学の具体的展開のために	共著	2004 年	カウンセリング研究, **37**, 280-290.	学校心理学の中心的なテーマである心理教育的援助サービスに関連の深いわが国の子どもに対するソーシャルサポートの研究を展望した。具体的には 1975 年から 2002 年までの 74 論文を分析の対象とした。その結果から、①ピアサポートシステムの構築の必要性、②子どもの教師や家族に対するサポート期待を分析する必要性、③中学生や高校生などの年齢の高い対象者への援助方法の検討の必要性が指摘した。（共著者：水野治久・石隈利紀）
42. 学校心理学とその動向 ― 心理教育的援助サービスの実践と	単著	2004 年	心理学評論, **47**, 332-347	「学校心理学」を一人ひとりの子どもの学校生活に関わる教師やスクールカウンセラ

理論の体系をめざして―				ーらのチームの援助として定義して、アメリカの”school psychology”（school psychologist の仕事）との違いを示した。そして学校心理学の学問体系、援助サービスのモデルと研究の動向について論じた。学校心理学は「モードⅠ」の研究の貢献を活かしながら、「モードⅡ」の研究を中核とする方向をめざすことが指摘された。
43. 他尊感情と自尊感情が自己表現に与える影響	共著	2005 年	筑波大学心理学研究, **29**, 89-97	本研究は、他尊感情という用語を新たに定義し、他尊感情と自尊感情が自己表現に与える影響を検討することが目的とされた。大学生 247 名を対象に質問紙調査を行った結果、適切な自己表現であるアサーティブな表現には、自尊感情と他尊感情の両方を高めることが重要であることが示された。（共著者：石川満佐育・石隈利紀・濱口佳和）
44. 中学生の対人関係ビリーフ尺度作成の試み	共著	2005 年	教育相談研究, **43**, 11-17	親･教師･友人に対する対人関係ビリーフ尺度を作成した。中学生 380 名に本調査を実施し、2 因子構造が得られ（関係維持、関係向上）、十分な内的整合性が確認された。（共著者：本田真大・石隈利紀・新井邦二郎）
45. 保護者と教師の面接における教師の言語コミュニケーションの分類 ―ロールプレイ逐語録に基づくカテゴリー構成 ―	共著	2005 年	信州大学教育学部紀要, **115**, 189-197	教師と保護者の面接場面での教師の言語コミュニケーションに焦点をあて、その特徴を明らかにするための分類項目を検討した。教師と保護者の面接を想定したロールプレイを実施し、教師の言語コミュニケーションを Street（1992）のカテゴリーを参考に分類した結果、教師の言語コミュニケーションの全体の半数以上は「情報提供」であり、「事実および一般的な知識に関する情報提供」「今後の対応に関する情報提供」「教師の意見に関する情報提供」の 3 つのカテゴリーに分類できることが明らかになった。（共著者：上村恵津子・石隈利紀）
46. 文化祭での学級劇活動における中学生の集団体験及び担任教師の援助介入	共著	2005 年	学校心理学研究, **5**, 37-48	文化祭での学級劇活動において、彼らの集団体験及び担任教師の援助介入について質的検討を行った。その結果、①学級劇活動では、「分業的協力」を特徴とし、生徒は学級集団全体へと視点を広げる②生徒の個人認知における不満足・葛藤から解決生産水準へ移行することで、小集団の活動が活性化した。③担任教師は、小集団活動が解決・生産水準へ移行するように介入していることが明らかになった。（共著者：樽木靖夫・石隈利紀）
47. 小学生における学校生活スキルに関する研究－学校生活スキル尺度（小学生版）の開発	共著	2005 年	学校心理学研究, 5, 49-58	小学校の学校生活スキルは、自己学習スキル、課題遂行スキル、進路決定スキル、集団活動スキル、コミュニケーションスキル、健康維持スキル、健康相談スキルの 7 つの下位尺度、計 43 項目になることが、明らかになった。（共著者：山口豊一・飯田順子・石隈利紀）
48. 教育相談のシステムの構築と援助サービスに関する研究	共著	2005	教育心理学研究, **53**, 579-590	本研究では A 中学校における第一筆者の養護教諭及び教育相談係としての実践をもとに、学校内の教育相談システムが構築される経過、及びシステム構築と心理教育的援助サービスの関係について検討した。その結果、A 中学校ではスクールカウンセラーの導入と中止に伴い、教育相談のシステムや相談室職員の役割が変化したこと、養護

				教諭がキーパーソンとなりチームのコーディネーションを行ったこと、その時々に活用できる援助者を生かした教育相談のシステムが構築されたことが明らかになった。（共著者：相楽直子・石隈利紀）
49. 中学生の言語的援助要請スキルと援助不安、被援助志向性の関連	共著	2006 年	大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門, **54** (2), 141-150	中学生 462 名を対象に友人、教師に対する言語的援助要請スキルと援助不安、被援助志向性の関連が検討された。分析の結果、友人に対しては言語的援助要請スキルと被援助志向性の関連が認められたが、学習・進路・健康領域において教師に対する被援助志向性には言語的援助要請スキルと援助不安が被援助志向性に関連していた。（共著者：水野治久・阿部聡美・石隈利紀）
50. 保護者と教師の面接における教師の言語コミュニケーションの分類Ⅱ ― グラウンディド・セオリー・アプローチによる分析 ―	共著	2006 年	信州大学教育学部紀要, **117**, 207-218.	修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて保護者面接における教師の発話分析を行い、教師の言語コミュニケーションの特徴を明らかにするための発話の分類項目を構築することを目的とした。結果、23 の概念が抽出され、これらはさらに子どもの支援を検討するプロセスと保護者との関係を構築するプロセスに大別することができた。今後、23 の概念の関係性について様々な解釈の可能性を検討することが課題であることが示された。（共著者：上村恵津子・石隈利紀）
51. 各学校段階における援助チームと校内支援委員会の実態 ― 援助チームの形成・維持に与える影響に焦点をあてて―	共著	2006 年	筑波大学学校教育論集, 29-44	本研究は、現在学校で行われている援助チームの実態について検討することおよび援助チームの形成・維持に貢献する要因について検討することを目的に、各学校段階に所属する校内の援助チームのコーディネーター役の教師、スクールカウンセラー、外部専門機関に所属する専門家を対象に調査を実施したものである。分析の結果、不登校、非行、発達障害それぞれについてのチーム援助会議がどのようにもたれているのかという実態が示された。（共著者：石隈利紀・飯田順子）
52. 私立高等学校における生活場面を活用したスクールカウンセリング	共著	2006 年	教育相談研究, 44, 15-22	高等学校における不登校生徒への援助のプロセスを記述、分析することによって、学校でのカウンセリングでは、生徒への援助だけでなく、教師や保護者への援助、学校の中にある組織や生徒の生活する場や時間などのあらゆる資源を統合して行う独自性を持つことを示した。（共著者：家近早苗・石隈利紀）
53. 中学校教師の被援助志向性に関する研究 ― 状態・特性被援助志向性尺度の作成および信頼性と妥当性の検討―	共著	2006 年	教育心理学研究, **54**, 75-89	本研究において中学校教師の「被援助志向性」を測定する「状態・特性被援助志向性尺度」を作成し、中学校教師２５０名を対象にした調査から、尺度の信頼性と妥当性を検討した。その結果、「状態被援助志向性尺度」は一因子であり、一方「特性被援助志向性尺度」は「被援助に対する懸念や抵抗感の低さ」と「被援助に対する肯定的態度」の２つの下位尺度から構成されることが示された。（共著者：田村修一・石隈利紀）
54. 文化祭での学級劇における中学生の小集団の体験の効果 ― 小集団の発展，分業的協力，担任教師の援助介入に焦点をあてて―	共著	2006 年	教育心理学研究, **54**, 101-111	中学生の学級集団づくりに活用される文化祭での学級劇において、彼らの小集団の体験の効果について検討した。①小集団の発展を高く認識した生徒は自己活動の認知（自主性、協力、運営）、他者との相互理解を高めた。②担任教師の葛藤解決への援

				助介入は小集団の発展を促進し、生徒の自己活動の認知、他者との相互理解に影響した。③分業的協力を高く認識した生徒は、そうでない生徒よりも学級集団への理解を高かった。（共著者：樽木靖夫・石隈利紀）
55. 中学生を取り巻くヘルパーに対する被援助志向性に関する研究 ―学校心理学の視点から	共著	2006 年	カウンセリング研究, **39**, 17-27	中学生 477 名を対象にスクールカウンセラー、担任・教科担当教諭、養護教諭、友だちに対する被援助志向性、援助不安、自尊感情、ソーシャルサポートなどが質問された。スクールカウンセラーの被援助志向性の得点が低く分析から除外した。担任・教科担当教諭、養護教諭、友だちに対する被援助志向性の被援助志向性には、呼応性の心配、ソーシャルサポートが関連していた。（共著者：水野治久・石隈利紀・田村修一）
56. 中学生の学校生活スキルと学校ストレスとの関連	共著	2006 年	カウンセリング研究, **39**, 132-142	本研究は、学校ストレスモデルにおける学校生活スキルの影響を検討することを目的に、中学生 240 名を対象に調査を実施した。自己学習スキル・進路決定スキル・集団活動スキルが特定の学校ストレッサーを低減すること、進路決定スキルと同輩とのコミュニケーションスキルが特定のコーピングを促進することが示された。同時に、学校生活スキルからストレス反応への直接的な影響および間接的な影響が示された。（共著者：飯田順子・石隈利紀）
57. 中学校のコーディネーション委員会のコンサルテーションおよび相互コンサルテーション機能の研究 ― 参加教師の体験から ―	共著	2007 年	教育心理学研究, **55**, 82-92	埼玉県内の中学校において、コーディネーション委員会に参加した教師に対して調査を行った結果から、コーディネーション委員会のコンサルテーションおよび相互コンサルテーションの機能と教師が受ける影響について論じた。教師は、コンサルテーションと相互コンサルテーションによって自信や安心、新しい知識の獲得、意欲の向上、当事者意識の高まりなどを得ていることが明らかになった。（共著者：家近早苗・石隈利紀）
58. 保護者はクライエントから子どもの援助のパートナーへどのように変容するか ― 母親の手記の質的研究 ―	共著	2007 年	教育心理学研究, **55**, 438-450	本研究は、不登校になった子どもの幼児から中学生までの母親の手記を、修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。発達障害があることが SC の面接でわかり気持ちの揺れを伴いながらも、母親がクライエントから子どもの援助のパートナーとなる心理的変容過程のモデルを生成した。さらに、カウンセリングニーズとコンサルテーションニーズの視点からも考察を加えた。（共著者：田村節子・石隈利紀）
59. 保護者面談における教師の連携構築プロセスに関する研究	共著	2007 年	教育心理学研究, **55**, 560-572	保護者面談における教師の発話を分析し、教師が保護者との連携を構築するプロセス、および教師が行う面談の特徴を明らかにした。分析結果より、面談において教師が自らの対応を振り返る点、積極的に対応策を提案する点がカウンセラーとの違いであり、教師が行う面談の特徴であることを明らかにした。（共著者：上村惠津子・石隈利紀）
60. コーディネーション行動がチーム援助の有用性に与える影響 ― 中学校における事例を通して―	共著	2008 年	教育相談研究, 45・46, 25-33	中学校における保護者を含む援助チームの実践事例をとりあげ、コーディネーション行動が援助チームの有用性に与える影響について考察した。保護者の援助ニーズによって、どのように援助チームを編成するか

				が異なり、コーディネーターは保護者と担任の仲介を行いながら、チームを編成していることが明らかになった。その結果子どもによりよい援助が提供できることが示唆された。（共著者：瀬戸美奈子・石隈利紀）
61. 学校生活スキルの発達的変化の検討	共著	2008 年	教育相談研究, **45・46**, 49-58	本研究は、学校生活スキル尺度（中学生版）の再検討および学校生活スキルの発達的変化の検討を目的に行なわれた。その結果、小学生から高校生までスキルが統合されていく可能性と、学校生活スキルから学校適応への影響における発達的変化が示された。（共著者：飯田順子・石隈利紀・山口豊一）
62. 学校の問題に対する教師の当事者意識に関する研究	共著	2008 年	教育相談研究, **45・46**, 59-64	学校の問題に対する教師の当事者意識を測定する尺度を作成した。項目は学校の問題に対して自分がどうするか、同僚がどうするかという視点から作成した。中学校教師を対象に質問紙による調査を実施し、教師の当事者意識の構造とそれを測定する項目16 項目を作成し、1 因子構造であることを明らかにした。（共著者：家近早苗・石隈利紀）
63. 中学生の悩みの深刻さ、援助要請時に受けた援助、受けた援助の期待との一致、援助評価と学校適応の関連の検討	共著	2008 年	筑波大学心理学研究, **36**, 57-65	中学生の援助要請行動後の適応を検討することを目的とした。中学生 1669 名を対象に調査した結果、悩みの内容が学習･進路のことである生徒と、心理･社会･身体のことである生徒によって援助評価が学校適応に与える影響の仕方が異なることが明らかにした。（共著者：本田真大・新井邦二郎・石隈利紀）
64. 中学校教師の被援助志向性を規定する要因- 会話スキル、校長のリーダーシップおよび職場風土に対する認知に焦点をあてて	共著	2008 年	カウンセリング研究, **41**, 224-234	教師の被援助志向性を規定する要因を検討した。中学校教師 250 名から質問紙を回収した結果、女性の場合のみ、「非言語的会話スキル」および「自己表現スキル」が高いと認知している教師ほど、「特性被援助志向性（被援助に対する懸念や抵抗感の低さの因子）」が高かった。（共著者：田村修一・石隈利紀）
65. 文化祭での学級劇での活動における中学生の困難な場面でも頑張る姿勢への教師の援助介入	共著	2008 年	日本教育工学会雑誌, **32**, 177-180	中学生の文化祭での学級劇の活動における自己評価に対して、困難な場面でも頑張る姿勢とそれへの教師の援助介入の影響を検討した。教師の援助介入は生徒の困難な場面でも頑張る姿勢を介して、生徒が小集団で協同できるような集団発展を促進して、生徒の自己活動の認知と他者との相互理解に影響した。（共著者：樽木靖夫・蘭千壽・石隈利紀）
66. 中学生の援助に対する評価尺度（援助評価尺度）の作成	共著	2008 年	学校心理学研究, **8**, 29-39	中学生の援助評価を測定する尺度を作成した。「問題状況の改善」「対処の混乱」「他者からの支えの知覚」「他者への依存」の 4 つの下位尺度、計 23 項目の援助評価尺度が作成され、いずれの下位尺度も高い信頼性があり、また妥当性を支持する結果が得られた。（共著者：本田真大・石隈利紀）
67. 保護者面談における保護者の連携構築プロセスに関する研究 ―保護者の発話分析を通して―	共著	2008 年	学校心理学研究, **8**, 59-73	保護者面談における保護者の発話を分析し、保護者が教師と連携を構築するプロセス、および保護者の発話の特徴を明らかにした。分析結果より、保護者の連携構築プロセスとして、援助具体化プロセス、発信・伝達プロセス、受信・相互作用促進プロセスから成るモデルを構築した。（共著者：上村惠津子・石隈利紀）
68. 中学校におけるマネジメント	共著	2009 年	日本学校心理	中学校の意思決定プロセスと機能を質的デ

委員会の意思決定プロセスと機能に関する研究			士会年報, 1, 69-78	ータより検討した。その結果、意思決定プロセスとして、問題・情報の共有化、学校の課題に対する協議、指示・伝達、決定、終了のカテゴリーが抽出された。また、機能としては、問題解決・課題遂行、校長の意思の共有、職員の教育活動の管理、組織の設定・活用・改善の 4 つのカテゴリーが抽出された。(共著者：山口豊一・石隈利紀)
69. 中学校の文化祭での学級劇活動における学級アイデンティティの獲得と肯定的な自己評価の形成	共著	2009 年	日本学校心理士会年報, 1, 119-128	中学生の学級づくりへの学校行事の活用について、文化祭での学級劇活動における生徒の自己活動の認知、学級集団への理解及び担任教師の介入を学級毎に検討した。その結果、①文化祭での学級劇活動で、生徒の自主性と運営、学級の肯定的理解を高めた。②文化祭での学級劇活動において学級アイデンティティの獲得につながる学級集団を肯定的に評価した学級では、自主性に関する自己評価を高めた。(共著者：樽木靖夫・石隈利紀・蘭千壽)
70. 中学生の悩みの経験と被援助志向性が対人関係適応感に与える影響	共著	2009 年	カウンセリング研究, 42, 176-184	中学生の悩みの経験と援助要請行動が対人関係における適応感に与える影響を検討した。中学生 380 名に調査した結果、中学生の援助要請行動は友人のみでなく、家族や教師に対して実行されることによっても、他者との関係における適応感を高めることが明らかにされた。(共著者：本田真大・石隈利紀・新井邦二郎)
71. 中学生のスクールカウンセラーに対する被援助志向性—接触仮説に焦点をあてて—	共著	2009 年	コミュニティ心理学研究, 12, 170-180	本研究は中学生 382 名を対象に質問紙調査が実施された。スクールカウンセラー（以下 SC）との会話経験などの接触頻度と SC に対する被援助志向性尺度を尋ねた。その結果、SC の認知は、被援助志向性に正の影響、会話経験は、被援助志向性の下位尺度と関連を示した。加えて、SC 便りの閲覧は被援助志向性の下位尺度に関連を示した。このことから接触仮説は検証された。（共著者：水野治久・山口豊一・石隈利紀）
72. 高校生の学校生活スキルに関する研究—学校生活スキル尺度（高校生版）の開発—	共著	2009 年	学校心理学研究, 9, 25-35	高校生の学校生活スキルを測定する尺度を作成した。 因子分析の結果から、高校生の学校生活スキルは、自己学習スキル、進路決定スキル、集団活動スキル、コミュニケーションスキル、健康維持スキルの５因子からなっていることが示された。各下位尺度の信頼性・妥当性も高いことが示された。(共著者：飯田順子・山口豊一・石隈利紀)
73. 中学校におけるチーム援助を促進する要因はなにか—学校組織を中心として—	共著	2010 年	教育相談研究, 47, 33-41	中学校におけるチーム援助を促進する要因について検討した。その結果、チーム援助を促進する要因は、マネジメント、体制づくり、チーム援助行動、学校の雰囲気の 4 つであることを明らかにした。（共著者：山口豊一・家近早苗・樽木靖夫・石隈利紀)
74. 学校心理士をどう養成するか— 大学院における関連科目新基準「誕生」の過程と意義 —	共著	2010 年	日本学校心理士会年報, 2, 5-18	2009 年に学校心理士資格認定委員会で作成した「大学院科目の新基準」の作成過程と意義について論じた。学校心理学の３つの柱に基づいて、コアとなる学問領域（「学校心理学」「教授・学習心理学」「発達心理学」「臨床心理学」)、援助スキル領域（「心理教育的アセスメント」「学校カウンセリング・コンサルテーション」、実務の領域（「生徒指導・教育相談、キャリア教育)、「特別支援教育」）の３領域、８科

				目と実習 2 科目になったことを説明した。（共著者：石隈利紀・小野瀬雅人・大野精一・松村茂治・橋本創一）
75. 教師の心理教育的援助サービスに関する意識はコーディネーション委員会の参加によりどう変わるか ― 学校に焦点をあてて―	共著	2010 年	日本学校心理士会年報， **2**, 65-72	コーディネーション委員会の機能に影響を受ける教師の心理教育的援助サービスに関する意識について、コーディネーション委員会に継続的に参加した教師 5 名を対象に聞き取り調査を行った。その結果、個人の意識の変容と学校組織全体の変容についての認識に分類できることが明らかになった。また学校全体の変化は、つながり感、支えられ感、援助者としての成長感であることがしさされた。（共著者：家近早苗・石隈利紀・岡村光幸・丹下真知子・横田隆・吉本恭子）
76. 中学校におけるマネジメント委員会に関する研究 ― マネジメント委員会機能尺度（中学校版）の作成 ―	共著	2010 年	日本学校心理士会年報， **2**, 73-83	中学校におけるマネジメント委員会が機能しているかどうかを測定するための尺度を作成した。その結果、【情報収集。問題解決】【教育活動の評価と見直し】【校長の意思の共有】の 3 つの下位尺度、計 29 項目からなるマネジメント委員会機能尺度（中学校版）になった。（共著者：山口豊一・石隈利紀）
77. 学校行事における教師の介入に関する一次的援助サービスモデルの提案	共著	2010 年	日本学校心理士会年報， **2**, 85-93	中学校での学校行事における教師の介入に関する一次的援助サービスモデルについて検討した。文化祭での学級劇活動を行っている教師４名を対象として半構造化面接を行い、その結果より検討した。その結果、①小集団で協力した活動を進めるための「話し合いを勧める介入」と②生徒に受けいれを任せた「提案の介入」であった。また、①機会の計画的設定の援助、②予防的援助、③促進的援助、④集団としてのふりかえり・意味づけ的援助の４つがモデルとして提示された。（共著者：樽木靖夫・石隈利紀・蘭千壽）
78. 教師が行う保護者面談に関する研究の動向と課題	共著	2010 年	信州大学教育学部研究論集, **3**, 127-140	保護者面談に関する研究の動向を探り、その課題を明らかにした。教師が行う保護者面談の実態を明らかにした研究はほとんどないこと、また、保護者面談の展開方法については代表的なモデルがあるわけではなく、コンサルテーションやカウンセリングの視点から保護者との連携に関するポイントが紹介されていることが明らかになった。今後、教師の特徴を活かした面談の展開方法やポイントを検討することが重要な課題となることが示唆された。（共著者：上村恵津子・石隈利紀）
79. 中学校のマネジメント委員会における機能の構造 ― 学校の特徴との関連から	共著	2010 年	跡見学園女子大学文学部紀要, **45**, 91-112	中学校の経営を行うマネジメント委員会の機能について、学校の規模や職員の編成、学校組織の編成などが与える影響について検討した。（共著者：山口豊一・家近早苗・樽木靖夫・石隈利紀・山本麻衣子）
80.高等学校における特別支援教育 ― 学校心理学の立場から―	単著	2010 年	LD 研究， **19**, 198-204	高校における特別支援教育について、学校心理学の立場から論じた。とくに援助ニーズの多様性や心理社会的発達課題に取り組むために、自助資源を活かすことや、三段階の心理教育的援助サービスの可能性や心理教育的援助サービスのシステムの活用について論じた。
81. システムレベルのコーディネーション行動が援助システムの活	共著	2010 年	カウンセリング研究， **43**,	高校における実践事例をとりあげ、コーディネーション行動が援助システム活性化に

性化に与える影響 —A中学校における実践事例を通して			278-286	与える影響について考察した。学校の援助システム構築プロセスを分析し、システムに関するコーディネーション行動はコミュニケーションの促進、援助サービス運営の改善、援助資源の活用、援助サービスの提供とプログラム開発の機能をもつことが示唆された。（共著者：瀬戸美奈子・石隈利紀）
82. 養護教諭が行う援助チームにおけるコーディネーションの検討：保健室登校の事例を通して	共著	2011 年	カウンセリング研究, **44**, 346-354	保健室登校のチーム援助の事例について養護教諭のコーディネーションついて検討した。その結果、①援助チームの形成、②援助チームの活用、③援助チームの移行や拡充が援助サービスの充実を促進し、養護教諭が行うコーディネーションの特徴は、①心身の健康の専門性を生かす、②子どもとのかかわりから、子どもの援助資源・自助資源を活用する、③学校保健活動におけるネットワークを活用する、④特定の学年やクラスへ属さないメリットを生かすという４点であった。（共著者：相楽直子・石隈利紀）
83. 中学校のマネジメント委員会に関する研究 —「問題解決・課題遂行」機能に視点をあてて—	共著	2011 年	跡見学園女子大学文学部紀要 **46**, A93-106.	中学校におけるマネジメント委員会の【問題解決・課題遂行】機能の下位機能について詳細に検討した。その結果、すべてのデータが山口・石隈（2009）のマネジメント委員会の【問題解決・課題遂行】機能における〔情報収集・共有〕〔対応策の検討・立案〕〔計画の促進〕〔連絡・調整〕〔手続きの確認〕の 5 つの下位機能で分類できた。よって、これらの機能はある程度一般化できる【問題解決・課題遂行】の下位機能であることが明らかとなった。（共著者：山口豊一・石隈利紀・本麻衣子）
84. 援助要請スキル尺度の作成	共著	2011 年	学校心理学研究, **10**, 33-40	中学生の援助要請時のソーシャルスキルを測定する尺度を開発し、信頼性と妥当性を確認した。妥当性は言語的援助要請スキル、KISS-18 との単相関係数、及び援助要請スキル遂行量と実行されたサポート量の関連から検討した。（共著者：本田真大・新井邦二郎・石隈利紀）
85. 生徒がとらえる心理教育的援助サービス尺度（中学生版）の作成	共著	2011 年	日本学校心理士会年報, **3**, 43-54	学校での教師の心理教育的援助サービスを生徒がどのようにとらえているかを明らかにするための尺度作成のプロセスを提示し、その構造について検討した。さらに中学生 3511 名を対象に質問紙調査を実施し、中学生の心理教育的援助サービス尺度は、学習や授業への工夫、進路に関するアドバイス、生徒の健康管理への配慮、生徒の悩みの相談の４因子であることを明らかにした。（共著者：家近早苗・石隈利紀）
86. 中学生の学級劇活動における分業的協力および教師の援助的介入に関する研究	共著	2011 年	日本学校心理士会年報, **3**, 87-98	文化祭での学級劇活動における生徒の「分業的協力」を高める教師の介入について実践事例および質問紙調査により検討した。その結果、分業的協力につながる「学級での協力を意識させる介入」が抽出され、分業的協力の認知の高い学級が学級の肯定的理解に関する評価を高めた。教師による葛藤解決への援助が「分業的協力」を促進して生徒の学級集団への理解に間接的に影響した。（共著者：樽木靖夫・石隈利紀・蘭千壽）
87. 日本版ＫＡＢＣ－Ⅱの理論的背景と尺度の成	共著	2011 年	Ｋ－ＡＢＣアセスメント研	新しく開発されている日本版ＫＡＢＣ－Ⅱについて、理論的背景と具体的な尺度の構

			究, **13**, 89-99	成について論じた。この検査は、従来のカウフマンモデルを基盤としながら、ＣＨＣ理論を枠組みとしていること、また日本版では習得度の検査が拡大することが示された。（共著者：藤田和弘・石隈利紀・青山真二・服部環・熊谷恵子・小野純平）
88. 心理的な混乱が大きい保護者が援助チームのパートナーとなる心理的変容過程モデルの検討	共著	2011 年	教育相談研究, **48**, 25-34	本研究は「心理的な混乱が大きい保護者のパートナーモデル（田村・石隈 2007）」を確認し実践上の有用性を検討したものである。保護者への半構造化面接の分析結果から，心理的な混乱が大きい保護者をパートナーとする援助チームモデルは実践上の意義があることが示唆された。（共著者：田村節子・石隈利紀）
89. 心理教育的援助サービスのコーディネーションに関する展望と課題	共著	2011 年	教育相談研究, **48**, 41-48	日本および海外のチーム援助とコーディネーションに関する文献・研究について概観した。日本のチーム援助が教師中心であると、そして組織の活用が鍵であることが分かった。日本の学校におけるコーディネーションへの期待と今後の課題について論じた。（共著者：家近早苗・石隈利紀）
90. 中学生の友人、教師、家族に対する被援助志向性尺度の作成	共著	2011 年	カウンセリング研究, **44**, 254-263	これまでに行われてきた援助要請・被援助志向性の概念を整理した上で、中学生を対象に友人、教師、家族に対する被援助志向性を測定する尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討した。その結果、内的整合性、内容的妥当性、構成概念妥当性が支持された尺度が開発された。（共著者：本田真大･新井邦二郎･石隈利紀 ）
91. 心理教育的援助サービスを支えるコーディネーション委員会の機能尺度（中学校版）の開発 ―学校全体の援助サービスの向上をめざして―	共著	2011 年	学校心理学研究, **11**, 57-68	中学校のコーディネーション委員会の機能を測定するための尺度を開発した。教師 432 名を対象に質問し調査を実施した。その結果、コーディネーションに委員会の機能尺度は、マネジメントの促進機能、コンサルテーションおよび相互コンサルテーション機能、学校・学年レベルの連絡・調整機能、個別の子どものチーム援助の促進機能の４因子構造であることを明らかにした。また、尺度の信頼性、妥当性について検討した。（共著者：家近早苗・石隈利紀）
92. 発達障害のある子どもの「心の危機」と「学習」の支援―大震災における子ども・学校支援を進めながら―	単著	2012 年	LD 研究, **21**, 2-8	発達障害のある子どもの支援について、東日本大震災における子ども・学校支援との関連から論じた。とくに「心の危機」のおける４つの支援（安全・安心な環境、日常生活、自己コントロール感、できごとの受け止め）およびレジリエンスについて、具体的に論じた。
93. 学習困難のある子どもたちを援助する 21 世紀の「賢いアセスメント」	共著	2012 年	LD 研究, **21**, 15-23	21 世紀の「賢いアセスメント」について、ＬＤの子どもへの支援に関連して論じた。ＣＨＣ理論によるＫＡＢＣ－Ⅱの開発、ＷＩＳＣ－Ⅳの解釈について、教育的介入の観点から論説した。「賢いアセスメントの哲学」を意識しながら、知能検査によるエビデンスを得て、ＬＤ等の子どもの学習生活を支援することを強調した。（共著者：Kaufman, A. S.・高橋知音・染木史緒・石隈利紀）
94. 個別学力検査の意義と活用―学習障害児を援助する臨床的ツールとして―	共著	2012 年	LD 研究, **21**, 24-31	個別学力検査の意義と活用について、アメリカの歴史もふまえて論じた。代表的な学力検査であるＫＴＥＡ－Ⅱを紹介しながら、学力検査の構造と意義を述べた。そしてＲＴＩのみのアセスメントの限界（例：

				子どもへの指導に使えない）を示し、ＲＴＩと包括的なアセスメントの組み合わせの意義を指摘した。また習得度が拡大された日本版ＫＡＢＣ－Ⅱの、個別学力検査としての可能性が示された。（共著者：Kaufman, N. L.・Kaufman, A. S.・藤堂栄子・熊谷恵子・石隈利紀）
95. 教職志望者の被援助志向性を規定する要因：　教育実習場面に焦点をあてて	共著	2012 年	カウンセリング研究, **44**, 29-39	教職志望大学生を対象とした質問紙調査研究を行った。教育実習における教職志望者の「被援助志向性」を規定する個人内要因（会話スキル、自尊感情）、環境・状況要因（指導教員の指導力、協働的職場風土、教育実習中の悩み）について、それらの関連を検討した。（共著者：田村修一・水野治久・石隈利紀）
96. 日本学校心理士会による東日本大震災支援 —子ども・学校支援チームを中心にして	共著	2012 年	日本学校心理士年報,　**4**, 165-177	2011 年 3 月 11 日以降、日本学校心理士会は「子ども・学校支援チーム」を立ち上げ、ＮＡＳＰ（アメリカ学校心理士協会）とＩＳＰＡ（国際学校心理学会）と綿密な連携をとり、被災地の支援をしてきた。その支援活動（支援チームによる被災地のリーダーへの支援、ＮＡＳＰ資料の翻訳など）、そしてアメリカのスクールサイコロジストと日本側担当者（西山）とのコンサルテーションについて論じた。またシンポジウムも含めて東日本大震災支援に関する取り組みをまとめた。（共著者：石隈利紀・大野精一・西山久子・都丸けい子）
97. 中学校におけるマネジメント委員会の機能がチーム援助体制及びチーム援助行動に与える影響 —主任層に焦点をあてて—	共著	2012 年	日本学校心理士会年報,　**4**, 103-112	中学校での主任を務める教師を対象に質問紙による調査を行い、学校のマネジメント委員会の機能は、学校の子どもへの援助の体制と主任教師が行うチーム援助に関する行動と関連することを明らかにした。（共著者：山口豊一・樽木靖夫・家近早苗・石隈利紀）
98. 中学校教師の心理教育的援助サービスに関する意識変容尺度の開発—コーディネーション委員会への参加に焦点をあてて—	共著	2012 年	教育相談研究, **49**,　33-41	コーディネーション委員会に参加した教師の意識の変容と教師集団が受ける影響について測定する尺度を開発した。作成した尺度について、中学校教師 432 名に対して質問紙による調査を実施し、その結果、学校の問題に対する当事者意識は１因子構造であり、教師の意識の変化尺度は、生徒へのかかわりの積極性、援助者同士のつながり、話し合いへのコミットメントの高まりの３因子構造であることを明らかにした。さらに尺度の信頼性と妥当性について検討した。（共著者：家近早苗・石隈利紀）
99. 養護教諭が行う援助チームのコーディネーションの検討— 高校における生徒参加型の援助チームの事例を通して —	共著	2012 年	教育相談研究, **49**, 9-18	本研究では、高校生の女子生徒がチームの話し合いに参加した事例での養護教諭のコーディネーションについて検討した結果、生徒の自助資源の活用を促す養護教諭のコーディネーションには、「援助者連携」「援助チーム会議の活用」「援助チームの拡充」というコーディネーション活動があることが分かった。そして「生徒参加のアセスメント」「取り組みのフィードバック」というコーディネーション活動を支える補助的な活動があることが明らかになった。（共著者：相楽直子・石隈利紀）
100. みんなの援助が一人の援助 — どのように一次的援助サービスが二次的援助サービス・三次的援助サービスの土台になるか	単著	2012 年	学校心理学研究, **12**,　73-82	心理教育的援助サービスに関する判断を行う際の「欲求」と「ニーズ」の概念を紹介し、その異同を論じた。そしてすべての子どもを対象とした一次的援助サービスが、

				どのようにして苦戦する子どもへの二次的・三次的援助サービスの土台になるかについて論じた。そのためには、一人ひとりの学校生活の状況を把握しながらの援助、グループプロセスの促進、チームとしての学校づくりが必要であると指摘した。
101. 震災支援から学ぶ学校心理士の可能性 ― 東日本大震災 子ども・学校支援チームの活動（2011年から2012年）より ―	共著	2012年	日本学校心理士会年報, **5**, 151-167	日本学校心理士会における「東日本大震災子ども・学校支援チーム」の2年間の活動について、8回の会議録の分析を通して、「援助ニーズ」「援助活動」「国内外との連携と情報共有・発信」「今後の方針と課題」の視点から論じた。その結果、支援活動の成果として、反応的支援からニーズにそった支援へ、そして成長促進的成果に根ざした支援へと変化したことが分かった。（共著者：石隈利紀・大野精一・西山久子・都丸けい子）
102. 学校に対して要求が強い母親が子どもの援助のパートナーへとどのように変容するか ― 母親のインタビューの質的分析 ―	共著	2012年	日本学校心理士会年報, **5**, 101-113	本研究は学校に対して要求が強い母親が子どもの援助のパートナーへとどのように変容するかについて、母親のインタビューを質的に分析した。保護者のインタビューの分析結果から「学校に対し要求が強い保護者のパートナーモデル」を生成した。（共著者：田村節子・石隈利紀）
103. 震災後2年間の活動報告：学校心理士による子どもと学校への支援 ―第35回International School Psychology Association 年次大会での発表をもとに ―	共著	2014年	日本学校心理士年報, **6**, 115-128	東日本大震災子ども・学校支援チームが震災直後からチームとして行ってきた支援活動を被災地に在住する支援者と遠隔地に在住する支援者の立場からまとめ、チームの形成過程について整理した。また遠隔地にいる援助者の役割の重要性を指摘し、情報の共有がチームでの援助に需要な意味を持つことを明らかにした。（共著者：西山久子・我妻則明・瀧野揚三・Pfohl, B.･大野精一・石隈利紀）
104. 小学生の母子保健室登校の実態についての調査―養護教諭の観察評定による調査を通して	共著	2014年	日本学校心理士会年報, **6**, 93-102	本研究では、母子での保健室登校の実態について養護教諭の観察を通して調べた。A県の小学校養護教諭394名を対象の質問紙調査の結果、母子保健室登校の対応経験ありは86名で、157事例であった。また86名を対象とした2次調査では、75名のうち52事例が教室復帰をしていた。また、子どもの不安や緊張と母親の情緒不安定との相互作用が起きていること、保健室登校を経験した母親はよい母子関係を築く努力をし、親役割を機能させていたことが明らかになった。（共著者：藤井茂子・濱口佳和・石隈利紀）
105. 小学生の母子保健室登校における担任の心理的変容プロセス	共著	2014年	教育相談研究, 51, 51-60	本研究では、母子保健室登校の援助経験によって生じる担任の心理的変容プロセスを明らかにした。母子保健室登校の援助経験のある小学校担任を対象に半構造化面接を実施し、M-GTAによって分析し、3カテゴリーグループ、7カテゴリー、18概念に分類された。担任の心理的変容プロセスは、「担任としての思い」から「母子保健室登校についての理解の深まり」に進み、「養護教諭や教職員とコミュニケーション」を重ねて、「母親との信頼関係」を築き、「子ども理解の深まり」にいくことが明らかになった。（共著者：藤井茂子・石隈利紀）

106. 東日本大震災を体験した後の子どもと学校のレジリエンスを高める取組み	共著	2015 年	日本学校心理士会年報,7, 159－167.	2011 年東日本大震災直後に立ち上げられた日本学校心理士会「東日本大震災子ども・学校支援チーム」の活動を概観して、「子どものレジリエンス」の発揮と成長が見られたこと、そして子どもや教員を支援する「学校のレジリエンス」の発揮や成長を観察した。その内容を学校心理学の視点から考察し、自然災害と付随する学校危機予防への包括的な取り組みのあり方と課題を整理した。(共著者：西山久子・石隈利紀・家近早苗・小泉令三・Pfohl,W.)
107. Intellectual assessment of children and youth in Japan: Past, present, and future.	共著	2016 年	International Journal of School & Educational Psychology,4, 241-246.	日本における知能検査の歴史、学校教育における活用、検査結果の解釈の方法、知能検査翻訳、そして知能検査活用の課題について論じた。日本では教師主導の心理教育的援助サービスが進んでおり検査結果と指導のつながりが強い。これから公認心理師の誕生を経て、教師と心理職の連携の必要性について考察した。(Ishikuma, T., Matsuda, O, Fujita, K., & Ueno, K. (2016))
108. 「チーム学校」における心理教育的援助サービス―公認心理師の誕生と学校心理士のこれから	単著	2017 年	日本学校心理士会年報, 9, 5－20	学校心理士会年報の 1 巻から 8 巻までの理論論文を中心にレビューしながら、学校心理学の枠組みにそって学校心理士の活動を論じた。チーム学校を促進する学校心理士の役割や公認心理師誕生後の学校心理士の課題について考察し、提案した。
109. 日本における学校教育および心理学の動向と学校心理学・学校心理士の展望	単著	2018 年	日本学校心理士会年報, 10, 4－16	日本における学校教育および心理学、それぞれの動向をまとめ、学校心理学と学校心理士の歴史を振り返り、そして学校心理学の課題・可能性と学校心理士の未来について提案した。心理学の動向としては、2015 年の公認心理師法の公布が歴史を変えるものとなった。学校心理学と学校心理士の歴史は、誕生期、発展期、社会参加期に分けて論じた。
110. 小学生の母子保健登校による養護教諭の心理変容モデルの構築―修正版グランテッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成―	共著	2018 年	カウンセリング研究, 51 (1), 14－26	本研究では、母子保健室登校の援助経験によって生じる養護教諭の心理的変容プロセスを明らかにした。母子保健室登校の援助経験のある小学校の養護教諭 13 名を対象に半構造化面接を実施し、M-GTA によって分析し、57 概念、14 カテゴリー、3 カテゴリーが抽出された。養護教諭の心理的変容は、学校のサポート要因や母子保健室登校の学校の援助の影響を受け、養護教諭の子どもの成長発達と職務特性についての理解とまとめられた。(共著者：藤井茂子・石隈利紀)
111. チーム学校で促進する学校メンタルヘルス	単著	2019 年	学校メンタルヘルス研究, 22,32-37	本論文では、チーム学校のねらいとシステムについて解説し、教員、専門スタッフ（スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなど）、保護者がチームとなり、学校・家庭・地域が連携して、一人ひとりの子どもの援助ニーズに応える心理教育的援助サービスについて論じた。
112. 学校危機における安全教育の促進のための研修プログラムの開発―チーム学校	共著	2019 年	安全教育学研究, 18(2), 1-18	本研究の目的は，学校危機における安全教育の担い手である援助職（指導主事，SC，SSW）が行う緊急支援の内容（三者共通の支

（指導主事、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー）による緊急支援に焦点をあてて―				援内容，それぞれの支援内容や役割分担）について明らかにすることであった。緊急支援チームの支援者，つまり外から来る指導主事，SC，SSW に焦点を当てて調査を行った。その結果，緊急支援における指導主事，SC，SSW の役割や支援内容の特徴や緊急支援の基盤となる支援内容が明らかになった。（共著者：松浦正一・石隈利紀）
113. 学校マネジメントがチーム援助体制、心理職活用およびチーム援助行動に与える影響	共著	2019 年	カウンセリング研究，52，33-46	本研究では，学校マネジメント，チーム援助体制，心理職活用およびチーム援助行動との関係を検討することを目的とした。そこで，小・中・高・特別支援学校の教職員 1,966 名に対する質問紙調査を実施した。その結果，管理職と一般教職員（主任層を含む）に共通して，チーム援助行動の［チーム援助への積極的関与］は，マネジメント委員会の［校長の意思の共有］，チーム援助体制の［学年会・委員会の活用体制］と［学年会・委員会の会議の運営］，心理職活用の［心理職の評価］から影響を受けていた。（共著者：山口豊一・水野治久・本田真大・石隈利紀）
114. 触れる関わりが自閉症者と定型発達児童生徒との関係性に与える影響	共著	2020 年	東京成徳大学臨床心理学研究，20，67-75	本研究の目的は，他者との「触れる関わり」が，障がいのない定型発達児童生徒と障がい者（特に自閉症者に焦点を当てる）のコミュニケーションにどのような変化をもたらすのかを明らかにすることであった。主な研究対象者は，自閉症者 A さん（25 歳）と障がいのない定型発達児童生徒３名（小学６年生），以上の４名であった。本研究では，Z 総合型地域スポーツクラブで行われるバスケットボールプログラムの中でリバウンドゲームの時間を設け，そのゲームの中で，A さんと障がいのない定型発達児童生徒に「触れる関わり」を実施してもらい，両者のコミュニケーションがどのように変化するのかを調査した。まず録画機材を用いて，全４回に渡るゲームを継続して観察し，得られた観察データを分析した。次に，全てのゲームを観察し終えた後，上述した定型発達児童生徒３名を対象にした半構造化面接に基づくインタビュー調査を実施した。それらのデータを分析した結果，ハイタッチが，A さんと定型発達児童生徒との間で生じるコミュニケーションの活性化に影響を与え，相互理解の促進に寄与していることが示唆された。（共著者：池田岳・石隈利紀）
115. カウフマン先生と私～賢いアセスメントからの学び	単著	2021 年	Ｋ－ＡＢＣアセスメント研究 23，1-15.	知能検査の開発と解釈の研究で世界的に著名なカウフマン博士（夫妻）と著者との関わりとカウフマン博士の「賢いアセスメント」について紹介した。日本における知能検査の活用への示唆も述べた。
116. Influence of functions of a coordination committee on teachers'	共著	2021 年	psycholo-educational support. Journal of School Psychology，20	本研究の目的は，特別な援助ニーズがある子どもたちのためのコーディネーション委員会の機能が，教師による生徒への心理教育的援助サービスにどのような影響を与えるかを明らかにすることであった。そこで中学校教師 432 名を対象に質問紙による調

			, 1-19.	査を実施した。調査の内容は,「問 1：コーディネーション員会の機能」,「問 2：学校の問題に対する当事者としての意識」, 問 3：心理教育的援助サービスに対する教師の意識」,「問 4:教師の心理教育的援助サービス」であった。その結果, コーディネーション委員会の 4 つの機能（①個別のチーム援助の促進機能, ②コンサルテーション及び相互コンサルテーション機能, ③マネジメントの促進機能, ④学校・学年レベルの連絡・調整機能）のうち, ①個別のチーム援助の促進機能を除く 3 つの機能が, 教師の「学校の問題に対する当事者としての意識」と「心理教育的援助サービスに対する教師の意識」に正の影響を与えていることが明らかになった。また, コーディネーション員会の機能は,「学校の問題に対する当事者としての意識」と「心理教育的援助サービスに対する教師の意識」を通して教師の心理教育的援助サービスに正の影響を与え, コーディネーション委員会の機能の中で, ①個別のチーム援助の促進機能と④学校・学年レベルの連絡・調整機能は直接的に教師の心理教育的援助サービスに正の影響を与えることが明らかになった。（共著者：Iechika, S. & Ishikuma,T.）
117. 青年・成人を対象としたいじめの影響尺度の改訂といじめ体験の立場の影響	共著	2021 年	心理臨床学研究, 39, 419－430	18 歳以上 60 歳以下の 452 名に対して調査を行い、「いじめの影響尺度」（改訂版）を作成した。「情緒的不適応」「同調傾向」「精神的強さ」「他者尊重思考」「アサーション力」「前向きな進路選択」の 6 因子 39 項目からなる尺度となり、PTSD および PTG の両側面から一定の妥当性が検証された。（共著者：香取早苗・石隈利紀）
118. チーム学校尺度の作成―学校組織へのコンサルテーションをめざして	共著	2022 年	日本学校心理士会年報, 14,42-56	茨城県、高知県の中学校教師 165 名を対象とした調査結果に基づき「チーム学校尺度」の検討を行った。その結果「コーディネーション委員会の機能」「教師の心理教育的援助サービスに関する態度」「教師の心理教育的援助サービス」の３つの尺度の信頼性・妥当性が支持された。さらにチーム学校尺度を活用した、学校組織へのコンサルテーションの５つのステップについて考察した（著者：家近早苗・石隈利紀）
論文:他 171 本、計 289 本				